は　じ　め　に

大阪府では、平成 14（2002）年度から、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会を設置し、府域の子どもの読書活動を推進してまいりました。(注1)

平成 15（2003）年 1 月には、「大阪府子ども読書活動推進計画」が公表され、その計画にもとづき「連携」をキーワードに事業案が立案されました。

そこで、平成 15（2003）年度から、読書活動に取り組んでいるボランティアを支援するための講座「子ども読書ファシリテーター講座」「おはなしスキルアップ講座」を行い、受講者の交流会も開催しました。この講座は、3 年間の予定でスタートし、平成 17（2005）年度に終了しました。(注2)　さらに、平成 17 年秋に大阪府域の学校・公立図書館・子どもの読書に関わるボランティアの方を対象に子どもの読書活動に関するアンケート調査を実施しました。

平成 18（2006）年度は、文部科学省の助成を受けて、河内長野市と寝屋川市で乳幼児期と学齢期の子どもたちの読書活動を推進するために地域のネットワークづくりをめざしたモデル事業を実施しました。また、同じく助成を受けて、子どもを対象としたモデル事業として、詩人の島田陽子さんを講師にお招きして、小学校と大阪府立国際児童文学館でオーサービジットを行いました。

あわせて、平成 19(2007)年 2 月に、島田陽子さんの講演会「詩を楽しむ・ことばを楽しむ」と今年度の成果を報告する報告会を開催しました。

ここに、今年度の成果をまとめました。ご高覧いただき、今後の子どもの読書活動のよりいっそうの推進に役立てていただければ幸いです。

注 1　平成 14 年度は大阪府子ども読書活動推進連絡会議という名称でしたが、15 年度から大阪府子ども読書活動推進連絡協議会に名称を変更しました。構成員は、大阪市教育委員会　大阪府立中央図書館　大阪市立中央図書館　大阪府教育センター　大阪市教育センター　大阪公共図書館協会　大阪府学校図書館協議会　大阪市学校図書館協議会　学校図書館を考える会・近畿　大阪府子ども文庫連絡会　大阪府教育委員会　財団法人大阪国際児童文学館で、これに 18 年度は吹田市立中央図書館と枚方市立中央図書館が加わりました。事務局は財団法人大阪国際児童文学館が担当しています。

注 2　これらの講座は、大阪府教育委員会・財団法人大阪国際児童文学館主催、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会・開催図書館との共催という体制で行いました。

もくじ

はじめに …… (1)

講演会「詩を楽しむ・ことばを楽しむ」

（島田陽子さん） …… 1

地域のネットワークづくり …… 19

・ 河内長野市の事業報告 …… 21

・ 寝屋川市の事業報告 …… 27

オーサービジット …… 35

・羽曳野の小学校の報告 …… 37

・大阪府立国際児童文学館の報告 …… 42

講演会「詩を楽しむ・ことばを楽しむ」

日　時：平成19（2007）年２月15日（木）　14時～16時

場　所：ホテルアウィーナ大阪

講　師：島田　陽子　さん

主　催：大阪府教育委員会・財団法人大阪国際児童文学館

共　催：大阪府子ども読書活動推進連絡協議会
大阪市教育委員会　大阪府立中央図書館　大阪市立中央図書館　大阪府教育センター　大阪市教育センター
大阪公共図書館協会　大阪府学校図書館協議会　大阪市学校図書館協議会　学校図書館を考える会・近畿
大阪府子ども文庫連絡会　吹田市立中央図書館　枚方市立中央図書館　大阪府教育委員会　財団法人大阪国際児童文学館

１．はじめに

こんにちは。今ご紹介いただきました、島田陽子です。

きょうはみなさんが、子どもたちに向けて読書活動を一生懸命にやってくださっているのをお聞きし、私たち物書きは､本という子どもを生みっぱなしにして､みなさんに育てていただいているようなもので、育てたり、広げたりという努力をあまりしてきませんでしたので、申し訳ないなあと思いました。けれども、今回は、おかげさまで今まで経験したことのない子どもたちと直接出会うというチャンスをいただきました。小学校での45分授業というのは、初めての経験で、不慣れなことをお引き受けして、一番迷惑したのは子どもたちだったのではないかと思って後悔していたのですが、先ほどから羽曳野市立西浦東小学校の岡田先生や大阪国際児童文学館の土居さんがじょうずにおっしゃってくださって、本当かなと思うぐらい恥ずかしかったです。でも、私のへたな授業でしたけれども、子どもたちが次々と詩を書いて持ってきてくれまして、本当にありがたく思いました。こんなふうに、初体験のことをさせていただき、いろんな勉強をさせていただきましたので、それについてまず最初にお話したいと思います。

２．詩は発見である

私が今回のワークショップを通して子どもたちに伝えたかったことは、「詩は発見である」ということなのです。もちろん「感動を詩に書きましょう」というのは、これまでよく言われてきたことで、大前提なのですが、「感動を詩にする」と言われても難しいのです。私自身がどうやって詩を書いているかというと、「あ、なんでやろ」「あ、おかしいな」というように驚いたことをきっかけにして詩にしていくということが多いのです。

私は、現代詩を何十年も書いてきて、途中から子ども向けの詩や童話、それからエッセイなど、いろんなものを書くようになったのですが、一番初めは現代詩で自分の言いたいことを訴えたいというのがもとでした。島田陽子がどんな仕事をしてきたかを知りたい方は、『新編　島田陽子詩集』[1]という文庫本をぜひご覧頂きたいと思います。そこには、今までの詩集からの詩の抜粋、エッセイ、杉山平一さんと石原武さんの解説と年譜などが載っています。

さきほどの話にもどりまして、詩を書くときに何を根拠にして書くかというと、「発見」なんです。何かを発見したとき、驚いたときに、心が動いているわけです。感動の中には、喜びとか悲しみとかいろんな

ことがありますけれど、喜びというのは、案外詩になりにくいのですね。むしろ怒りのほうが詩になるのです。私が詩を書き始めたのも怒りからなのです。金子光晴でしたかが「自分は怒りから詩を書いている」と書いています。怒りという感情は、人間の感情のなかで一番激しいものです。最初は、女として異議を申し立てたいという怒りから詩を書き始めています。

詩を書くには「発見と批評」が大切だと思っています。けれども、子ども向けに詩を話す場合、「批評」というのは、ちょっと難しい。ともかく、「あ、なんでやろ」「あ、おもしろいな」と思ったこと、「発見」を詩に書くといいよということを子どもたちに伝えたかったのです。

今回経験をさせていただいてよくわかったのは、こんな不慣れな私でも、こちらがよいボールを投げれば、子どもたちは必ず受け止めてくれるということです。反対にこっちがへただったら、受け止めにくいのです。これは言えば、演劇における観客と舞台の関係みたいなものだと感じました。子どもたちと直接に出会って、いろいろと勉強をさせていただいてありがたい機会だったなと思います。

３．詩を楽しむ

①足立巻一さんの詩「動詞」

次に、詩についてお話したいと思います。

最初に、子どものことを書いた詩のなかで、私が一番好きで思い出す詩というのが、この足立巻一さんの「動詞」と杉山平一さんの「幼女」です。

この「動詞」という詩を書いた足立巻一さんは、72 歳で亡くなっているのですが、「きりん」[2]という児童詩を集めた本の編集をなさったり、何十冊と言う著作がある偉い先生だったのですが、詩集は 4 冊ほどしか出しておられません。1983 年に理論社から出した『雑歌（ぞうか）』というのは、いろんな歌や詩を集めた、という意味のタイトルなのですが、その詩集の中から「動詞」という詩を読ませていただきます。

動詞

足立巻一

けさ、突然
<育つ>という動詞の語源を知りたくなった。

巣立つ。
巣起つ。
進立つ。
添立つ。
背立つ。
……
字引きには諸説がならんでいたが
どのことばも張りがあって美しい。

真の字という４歳の幼児
大の字という六歳の童子が
ならんで白い食卓に向かっている。
並列する動詞のように。

『雑　歌』

足立巻一さんの「動詞」は、本当にさわやかで、あたたかくて、すがすがしいよい詩だと思います。この詩を初めて読んだときに、すぐ字引で「育つ」を調べました。どの字引から取ってこられたのだろうということで、大修館書店の『諸橋漢和事典』全 10 巻を見てみたのですけれども、詩のなかにあることばはない。今度は国語辞典で一番大きい小学館の『日本国語大事典』を調べましたら、ここに出ていることばが全部出ていました。ですが、字引ですから、こんなふうに並んでいるわけではない。だらだらと説明し

ている。そのなかから、このことばを拾い上げて、こうやって並べて書かれたというところに詩があります。

そして、「白い食卓」とありますが、本当に白い食卓だったか、何もかけていない普通のテーブルであったか、それはわかりません。でも、この詩の場合、真っ白な未来を持っている幼児二人にとって、白い食卓でなくてはだめなのです。やはり詩というのは、イメージでひとつの世界をつくるものなので、虚構を取り混ぜたほうが言いたいことがよりよく伝えられるということがあります。真実を伝えるためには、事実だけでなく、虚構も入れなくてはだめだ、ということをしょっちゅう考えながら書いています。ですので、このあいだ子どもたちに話をしたときにも、「たとえ話が入ってもいいのよ」「事実そのまま書いたらいいというわけではないのよ」ということもお話しましたが、子どもたちには少し早かったかなと反省しています。

②杉山平一さんの詩「幼女」

次に、杉山平一さんの詩「幼女」を紹介します。杉山先生は、現在92歳で宝塚にお住まいで、関西詩人協会の代表もされており、小野十三郎さん亡き後、関西の詩人としてトップの詩人です。「幼女」は、日本現代詩文庫の『杉山平一詩集』（1984年）[3]に収録されています。

幼女

杉山平一

むかいに腰掛けた女の子が二人
足が床にとゞいていない
一人があいての耳に口をよせて
何ごとかさゝやく
答えるように相手もまた
小さな手で口をかくして耳うちし
終ると二人そろって
こちらを向き
じーっと私を見つめる

『杉山平一詩集』

電車のなかでよく見かけるなんでもない風景で、ほほえましい風景ですが、「足が床にとゞいていない」というのですから幼稚園児ぐらいでしょうか。60代の終わりぐらいのときの詩なのですが、女の子二人がおじいさんの何を発見したんでしょうか。二人で口をかくして、耳うちして、なんだかものすごい大切なことを発見したという感じなのです。それを杉山さんは、「あの子たち、いったい何を発見したんだろう」と思いながら、見つめているのです。つまり、見る、見られる、というその関係が次第に緊張した空気になっている。そして、見る、見られるが反転したところで、緊張が頂点に達した、その一瞬を切りとっています。人生のちょっとした瞬間の機微を捉えるのが、杉山さんはものすごくおじょうずです。いつもこのような短い詩が多いのですが、本当にことばも選ばれていますし、状況の描写、状況の切り取り方は完璧です。私も長い間、詩を書いていますが、だんだん短くなりつつあります。このごろ、現代詩が散文化して、長い詩が多くなりましたが、詩というのはやはり短い言葉に凝縮されたものであって、散文のように書くのであれば、その必然の詩でなければと思います。

③詩「あかん」

私の詩に「あかん」（『大阪ことばあそびうた』[4]所収）という詩があります。

あかん

あかん　あかん
このドア　あかん
おしても　ひいても
　あかへん
だれが　やったかて
　あかん

あかん　あかん
いうたら　あかん
ないしょにしとかな
　あかへん
だれにしれたかて
　あかん

『大阪ことばあそびうた』

これは、同音異義の詩なのですが、ことばあそびは同音異義語のおかげでいろいろ楽しむことができます。この詩も、「あかん　あかん」というのは、「だめだ、だめだ」という意味と、ドアが「開かない」という意味とをかけています。第２連の「あかん　あかん　いうたら　あかん」というのは、「言ったらだめだよ」ということを言っているのです。大阪弁を使い慣れている人にはすっとわかりますけれども、他の土地の方から来た手紙には「これはぼくらにはわかりません」と書いてありました。やはりことばの微妙な意味は、その土地の人でなくてはわからないので、大阪ことばの詩をたくさん書いていますが、これらの詩が全国区になるなんて思ったこともありません。大阪の人たちの心に深く入り込んで、わかってもらって、愛してもらえたらいいという気持ちでしか方言の詩は書けません。それが、思わぬことに、教科書に採用されて載ったものですから、大阪ことばってこんな詩が書けるのだなと気がついていただけました。ただし、それも大阪弁というものが、もうなかば共通語化している、わかりやすい方言だからであって、例えば鹿児島弁の詩だったら、やはり取り上げていただきにくいと思います。ですから、大阪弁という方言を使うところに住んでいて本当に幸せだなと思っております。

④詩「チャウチャウ」

次の「チャウチャウ」（『続大阪ことばあそびうた』[5]所収）も同音異義の詩です。これは、大阪弁でちがうちがうということをチャウチャウと言います。それから中国原産の犬でチャウチャウという犬がいます。その二つをかけているのですが、いくつもの読み方があります。

チャウチャウ

ちゃうちゃう
ちゃうで
ちゃうちゃう
ちゃうねん

ちゃうちゃう
ちゃうのに
ちゃうちゃう
いわんといて

『続大阪ことばあそびうた』

＜「チャウチャウ」の朗読１回目＞

これがひとつの読み方で、今は全部犬で通しました。

＜「チャウチャウ」の朗読２回目＞

今回は、最後だけ犬にしてみました。こういうふうに大阪弁のことがよくわかっている方なら、４種類

ぐらいの読み方ができます。

⑤詩「やめてんか」

大阪府立国際児童文学館での催し[6]のときには、この「やめてんか」（『続続大阪ことばあそびうた―おおきにおおさか』[7]所収）という詩を子どもたちと読みました。

やめてんか

やめてんか
よるのよなかに
はしりまわるのん　やめてんか
みんなで　ダダダダ
ならんで　ダダダダ
はためいわくや
やめてんか

やめてんか
ちきゅうのうえで
きのこづくりは　やめてんか
うみでも　ピカドン
りくでも　ピカドン
いらんもんつくるのん
やめてんか

やめてんか
じめんのしたで
うごきだすのん　やめてんか
あっちで　モゾモゾ
こっちで　モゾモゾ
たのむさかいに
やめてんか

『続続大阪ことばあそびうた』

内容はすぐにわかっていただけたと思います。1番は暴走族にやめてんか。それから、原爆をやめてんか。そして、地震にやめてんか。なまずに言っているのですね。地面の下でもぞもぞ動かんといて、と。やはり、大阪のことばの音と響き、そういうものを楽しみながら読んでいただいたらいいと思います。

⑥詩「くちぐせ」

そして、最後に「くちぐせ」（『ほんまにほんま』[8]初出、のちに『うち知ってんねん』[9]にも収録）。大阪府立国際児童文学館では、この詩を通して子どもたちに、「詩というのはこういうふうに書いたらいいよ」というヒントをお話しました。

くちぐせ

うちの　おとうちゃんの
くちぐせは
さっぱり　ワヤや
ぺしゃんこや
もひとつ　おまけに
どもならん
そやけど　いつも　げんきやし
酔うたら　じきに　いいやるねん
あァ　ごくらくや

うちの　おかあちゃんの
くちぐせは
あんじょうしィや
はよしィや
もひとつ　おまけに
べんきょうしィ
しィや　しィやは　いややけど
じぶんにかて　いいやるねん
さあ　がんばらな

『ほんまにほんま』『うち知ってんねん』

これはもちろんフィクションです。私の体験ではないのですが、くちぐせのおもしろさというものに気がついたのです。みんな持っているくちぐせが違うのです。子どもが、くちぐせに気がついて、しかもおとうちゃんとおかあちゃんでは、くちぐせも違うということを発見した詩にしています。こういうふうに、何かを発見したら、詩になります。おもしろいと思うからです。感動という程のものでなくても発見したときには心が震えるのです。「いいもの見つけた、これ詩にしよう」と思うのです。

発見というのは、見つけたものすべてを肯定するわけではなく、変なことや矛盾したことを発見したときには、やはり批評という眼が出てきます。私は、庶民派で、社会派で、リアリズムという立場で書いていますから、どうしても反権力の眼で見てしまいます。時代風刺、社会風刺、人間風刺がしたくなります。批評性がなかったら、現実肯定にすぎず、読んでいてもおもしろくないと思います。

ですが、詩に批評性を入れるのはもってのほかだという人もいます。詩というものは、美しいものを書くのだ、という人もいます。詩とはなにかといったときに、100 人いれば 100 人違うのですが、私は「発見と批評」が詩であると思っています。他人の詩を読ませていただくときも、発見があれば、「あ、ほんまや。おもしろいわ」と追体験させていただけます。そして、そこに批評がずっと奥のほうにでもあったら、「あ、この人ちゃんとみてはるな」と共感ができるのです。そして、共感という細い道筋を一緒に行くことによって、詩の読者が広がっていくわけです。

この「くちぐせ」でも、おかあちゃんって、「しィや、しィや」って言うてるけど、「おかあちゃんかてがんばってやんねん」という、家族への愛情が感じられます。それからおとうちゃんだって、「どもならん」って言うてるけど、子どもはちゃんと見ているんですね、「酔うたらじきにごくらくや」って言うてるやないか、おもろいなあと思っています。

このように、実際に経験したことでなくても、くちぐせのおもしろさを伝えたいと思ったときに、こういう状況設定やキャラクター設定をして、そして大阪ことばでくちぐせになりそうなことばを探してきて、詩をつくります。でも、子どもたちにそこまで言うと混乱しますので、「ともかく発見が大切」「大阪弁でなくても、ふだん使っていることばで書いたら本音が言えますよ」ということを伝えたかったのです。それがうまく伝わったかどうかはわかりませんが。

⑦詩「先生　ふるいわ」

羽曳野市立西浦東小学校では、「先生　ふるいわ」（『ほんまにほんま』初出、のちに『うち知ってんねん』にも収録）という詩を大きく書いてもらって、声をそろえて読んでもらいました

先生　ふるいわ

―キャンプで―

おおきなクヌギに　のぼってん
花田くんが　スルスル
田中くんが　スルスル
からだの　よわい
高木くんも　スルスル
こんどは　うちや
とびついたら　こえがしてん
「おんなの子やのに　だいじょうぶか？」
あかんなァ　先生　ふるいわ

たまねぎむいてて　泣きやんねん
佐藤くんが　ポロポロ
小川くんが　ポロポロ
カレーの　すきな
石野くんも　ポロポロ
おおげさやな
わろてたら　こえがしてん
「おとこの子やのに　ないてるんか？」
あかんなァ　先生　ふるいわ

『ほんまにほんま』『うち知ってんねん』

これもまったくのフィクションです。男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくあれと言われて、私たちの世代は育ち、反発してきました。「おんなの子かてできるねん、それをやらしてくれへんのはなんでやのん」という思いでした。例えば、大学に行くのでも、最初は女性を入れなかった大学がいっぱいありました。おんなのこやから勉強せんでええと私は大学をあきらめさせられました。「おんなの子やのに」とか、「おんなの子らしく」と言われるのが納得できなくて、その異議申告をしたいと詩を書くようになっ

たのですが、その思いを書いたものです。

小説は全部フィクションです。だから、詩だってフィクションがあってもいいのよ。もしかしたら全部うそであってもかまわない。だけど、それによって、作者の言いたいことがきちんと書けて、「あ、ほんまやな」「そういうこともありうるな」「ようわかるわ」と思ってもらえたら、そのフィクションは成功しているわけです。子どもたちには難しいかなと思いましたが、「たとえ話でもいいのよ」と伝えました。

⑧詩「ほんまかな　ふしぎやな」

「ほんまかな　ふしぎやな」（未刊）は、子どもたちには紹介しなかったのですが、読んでみます。

ほんまかな　ふしぎやな

カリブの島にはお化けの木があるんやて　ほんまかな
お化けがあつまって会議をひらくパンヤの木
なんで　その木がいいんやろ

インドネシアはホタルの木
何万　何十万のホタルがびっしりたかって
ふわっ　ふわっと光るんやて　ふしぎやな
みんな　およめさん見つかるやろか

ペンギンのドミノたおしは　びっくりや
とんでる飛行機見てるまに
ふらっとうしろへこけてしもて
仲間にあたってつぎつぎたおれていくんやて
ほんまかな　ふしぎやな

世界中のほんまかな　ふしぎやな
おとなになったら見にいきたい
ほんまに　ほんまに見にいこう

これらの３つのことは、私自身が、新聞で読んだものです。海外特派員が書くニュースに載っていました。それで、どうしてパンヤの木がおばけの木になるのか、調べてもわからなくて、「なんでその木がいいんやろ」と思ったことが詩になっているのです。そして、インドネシアのこのホタルの木は有名で、テレビでもしょっちゅうやっていますが、「ホタルが光るのはお嫁さんを見つけるために光るのと違うのかな、でもあんなにたくさんいたら見つけられるやろか」と余計な心配をしているわけです。ペンギンのドミノたおしは、飛行機なんか飛んだことのない島で、ペンギンが仲間と一緒に立って見上げていて、一羽が倒れたら、次々と倒れていくという報道だったのです。それが非常におもしろくて、「あ、ドミノたおしやな」と思ってこういう詩ができました。

私がもっと若かったら、見に行きたいなと思うものがたくさんあります。世界中のほんまかな、不思議やなというものを大人になったら見にいきたいという子どもは私自身なのです。いつまでも「ほんまかな」「不思議やな」と驚く心を失いたくないと思っています。

３．大阪弁で詩を書く

①詩を生み出す苦しみ

今日のテーマは、「詩を楽しむ・ことばを楽しむ」ですが、楽しむのはいったい誰なのでしょうか。もちろん読者ですよね。それで、詩の書きてである私はどうかといいますと、私もまたあるときは書きてであ

るし、あるときは読みてなのです。

しかし、書きてになったときは、「詩を楽しむ・ことばを楽しむ」なんて言ってはいられないのです。つまり生みの苦しみに襲われているわけです。ですから、「詩に苦しむ・ことばに苦しむ」というのが本当の状況なのですが、その苦しむという状態がどういうものかと言いますと、ひとつの作品ができるまでに、「この表現でよいのか」「これで言いたいことがわかってもらえるのだろうか」「言い過ぎてはいないだろうか」「単なる説明に終わっていないだろうか」とかいろいろ悩みながらことばを選んでいるわけです。「このことばは、本当にここでよいのだろうか。もっと違うことばを持ってくるべきではないだろうか」と何日もかけて悩んだり苦しんだりしています。時間が経つと、また違う観点で自分の作品を読めますので、家事をしてから机に帰ってきて、もう１回新しい観点で自分の書いているのを読むと、「あ、これやめとこ」と削ったりします。

そのように苦しんで、そんなに苦しいのだったらやめたらいいのにといわれそうですが、それはできないのです。といいますのは、もう何十年間も「書くことが生きること」という道を歩いてきましたので、書くのをやめたらもっと苦しくなると思うのです。それに、そういう苦しみのあとには、必ず楽しみが来ることを知っています。

なんとか詩らしいかたちになって、今の自分の力だったらこんなとこだな、このへんでもう良しとせなあかんな、というふうにあきらめと見極めがつき、作品を見切り発車するときがくる。それが締め切りなのです。だから、締め切りがなかったら、ぜったい詩はまとまらないのですね。「ま、いいか、また見たらいいわ」と思うとノートの中に入ってしまうんです。ところが、締め切りがあって、それに追われて書いているものですから、ストックなんてありません。だから、ある同人雑誌から頼まれて新しい詩を書くとなったら、一生懸命生み出して送らないとしょうがないのです。私自身、同人誌はいくつかやっていますから、そこに私の詩が抜けるなんてとても耐えられません。そこで、締め切りがきたらもう、いやでも手放します。まあまあこんなところか、しようがないなあと思って見切り発車させる、その時の肩の荷を降ろしたような開放感、それがたまらないのですね。ですから、そのあとでその作品をまたひょっとのぞいて見ると、「うわーこれではあかん、ちょっと電話して直してもらおう」ということもあるのです。

編集していますと、ときどきそういう人から電話がかかってきます。「すみませんけど、あそこのとこ、ちょっとこういうふうに変えてください。校正のときに直りますやろか」とか言ってくるのです。その気持ちはよくわかります。作品を送ってしまった後でも、気になるのです。一応開放感は味わうのですけれども、やっぱり「あ、でもあれ、もうちょっとことばを変えたらいいのとちがうかな」というようなことを頭の隅でいつも考えているのです。

ところが不思議なことに、エッセイとか評論などの文章の場合は、それがないのです。これは詩の場合だけなのですね。私は鉛筆で書いていますから、文章を読んでみて、「あ、これとこれ、入れ替えた方がいい」と思うと、はさみでじょきじょきっと切って前後の何行かを入れ替えたり、書き直したりするとか、ことばを推敲したりとかいうことはしょっちゅうしますけれども、詩を書いてるときのような苦しみはないのです。

「これなんでかな」と思いましたら、結局詩というのはいつも見切り発車であって、それで良しとしているのですけれども、その詩に対して自分が求める完成度というのがある程度あるわけです。こういう詩にしたいというイメージがあるわけです。それが、そこまでいっていないのだけど、まあまあかたちになった、これで良しとせんならん、締め切りが来たし、ということで送り出すので、自分の思っている完成度と作品とのギャップに苦しむわけです。一方、散文は、わりあい思ったとおり書いていけばいいわけです。ことばを直すということはしますけれど、詩のことばを選ぶように、あるいは詩をつくるときのよう

に、凝縮して完成させるというのではないので、私はエッセイを書くのは好きなのです。詩人にならずにエッセイストになったらよかったなとよく思うのですけれども、そのプロになったら、それはまたそれで苦労があるのでしょうが、今は詩人としてのエッセイを書いているわけですから、それだけ気が楽なのかもしれません。

このように、私の場合は、詩というものは、いつでも見切り発車するもので、もうそれでやらなきゃしょうがないと思って書いています。

②大阪弁で書いた童謡

その見切り発車ができなくて、苦しんだのが、童謡です。

私は、詩は1950年ぐらいから書き出しまして、文章も詩も童謡もといろいろなものを書いていますが、すべて書きことばである共通語を使って書いていました。ところが、1970年代でしたが、童謡を書こうとすると思うように書けないのです。なぜか知らないけれど、本当に言いたいことが言えてない。男の子の立場になって書いてみたり、いろんなことを考えたりしましたが、うまくいかないのです。

北原白秋が言っていますが、「童謡は、童心童語の歌謡である」。つまり子どもの心、子どものことばで書く歌なのです。私の童謡は、いつも主人公は小学校4，5年生の女の子なのです。その私の内なる少女の心を童謡というかたちで書くのですが、それが自分の言いたい表現で書けていないという思いがずっとありました。

ですが、「ひかりのくに」から頼まれたりして童謡を書いたりするときは、もちろんそれなりに仕上げて、お渡しするのです。それができなかったら、プロとして通用しません。そういう仕事の場での童謡ではなくて、文学として、自分が言いたいことを書こうとすると思うようにかけないのです。もちろん、そんなもの、雑誌からの仕事としては入ってきません。「内なる少女の小学校４、５年生のことを書いてください」なんてことはないのです。ただ、自分が書きたいから書いているわけで、それが思うように書けないとなると、ひじょうに苦しいのですね。そこで、「なぜだろう」と一生懸命考えたのですけれどもわからなくて、考え続けて、暗中模索していたのが、1970年代の半ばごろだったのです。だから、詩は1950年代から書いていて、童謡、童話も子どもが生まれてから書いているし、仕事の童謡なら書けるけれども、文学としての自分の本当の言いたいことを言う童謡が書けないというのは苦しくて、もう童謡を書くのをやめようかなと思ったぐらいです。

けれど、そのときに、ふっと思いついて、大阪弁で書いてみたんですね。私はさきほど言いましたように東京生まれの東京育ちで、小学校の2年生から毎年転校して、11歳の5年生のときに豊中市に転校してきました。それからずっと豊中に住んで、大阪弁が自分のことばになりました。だから、よそもんなんです。大阪人は3代続かないと大阪人と呼びません。両親は東京のことばしか話しませんから、私は友だちからいろんなことばを覚えさせてもらいました。そのとき、「大阪弁って、ずいぶん違うんだな」と思いました。今まで自分がしゃべってきたことばではないことばが、いっぱい耳に入ってくるのです。それが、おもしろくてたまりませんでした。

そういうわけで、いつの間にか自分のことばになっていた大阪弁で書いたときに、自分の思っていることが、頭のてっぺんから糸で引き出すみたいに、するするするする思ったとおりに出てきて、びっくりしたのです。それをただ、書いていけばいいのですね。11歳で大阪に来た女の子の言いたいことを言うのですから、大阪弁で書くべきだったのです。頭の中では女の子は大阪弁で考えているのです。それなのに、共通語で書いているから表現し切れなかったということがわかったのです。大阪弁で書くことによって、自由になって、開放されて、もうなんでも書けるという喜びを得ました。

③生活語と共通語

子どもの心を書くなら、毎日使っているふだんのことば、生活語ですね。このごろは、方言とはあんまり言わないのです。去年私たち詩人が集まって、『現代日本生活語詩集』[10]という本を出しました。昔なら、『現代日本方言詩集』というところなのですが、今使っていることばは、私たちの中心のことばであるという思いがどこの地方の人にもあるわけです。方言というのは、いわゆる共通語に対する方言という感じがあって、京都の人なんかは絶対自分のことばが方言だなんて思っていません。京ことばは、千年の都のことばですから。大阪の人も、方言と考えないで、東京へ行ってもいつまでも大阪弁でしょ。つまり、自分のことばに自信があるところの人は、そのままのことばを使いますけれど、例えば青森とか鹿児島の人が東京に行ったら、通じにくいのでなるべく東京弁になるように努力しますね。でも、その地方では、それが中心のことばなんですよね。だから、方言ということばはなるべく使いたくないという考えがあって、『生活語詩集』というタイトルで詩集を出しまして、また今年２冊目を出すべく、みんなで編集することになっています。

私は1970年代に、毎日使っている生活語で書いたら、どれだけ自由にものが書けるかということを発見しました。それでうれしくなって、大阪弁でどんどんどんどん童謡を書いていったのです。ところが、現代詩を大阪弁で書こうとは思わないのですね。それから、エッセイとかそういうものも書こうとは思わない。そこまでまだ、私のなかで大阪弁が熟していない、というかやっぱり質が違うというのでしょうか。だから大阪弁というのは、おもしろいのですけれども、共通語で書いたものを大阪ことばに翻訳したらうまくいくかというと、ぜんぜん違うのですね。例えば、大阪弁の童謡を書くときは、初めから大阪弁で発想しているのです。共通語で書くときは、共通語で発想しているのです。

大阪人の大阪弁の発想と、ほかの人たちの共通語の発想は違うというのは、橋田壽賀子さんもおっしゃっていました。あの方は関西の人で関西弁で発想しているから、関西の人ならせりふがものすごく長くてもちゃんと覚えられるのですって。ところが、共通語がメインの人たちは、その文脈が違うのですね。だから、橋田さんの書かれたせりふを覚えにくいというようなことをどこかで読んだことがあります。

このように、大阪弁で書くのと共通語で書くのでは発想が違うから、大阪弁で書けないものもあるということもわかってきました。自分の心のなかを言う、あるいは主観を言うってことは、生活語である話し言葉で十分なのですね。ところが、客観的に叙述をしようと思ったり、小説のなかの地の文にあたるようなところを大阪弁で書こうと思ったら、いくら努力してもだめなんです。『海のポスト』[11]という童話集を書くとき、最初、地の文も会話も全部、大阪弁にしたかったのです。私の内なる女の子のことを書こうと思ったのですけれども、どんなにやっても地の文が語りのことばになるのですね。とうとうあきらめて、会話だけ大阪弁にすることにしました。やっぱり話しことばと、書きことばでは、違うのです。

それで、大阪弁でしか書けないもの、それから大阪弁のほうがよりよく書けるものは、大阪弁を使い、共通語のほうがよりよく書けるものは、無理に大阪弁にすることはない、共通語で書いたらいいと思うようになりました。なにも共通語を排斥することはないのです。方言も共通語も含めて日本語なのですから、どちらもじょうずに使えばよいということで、私は今、大阪弁と共通語のバイリンガルであると、自分で勝手に言っています。

私は、童謡、現代詩、少年少女詩、うたう詩といろんなものを書いていますから、盛りつけるお皿はいっぱいあります。だから「これは現代詩で書こう」と思ったら、現代詩のお皿に、「あ、これは童謡にしたい」と思ったら、童謡のお皿に盛るというふうに、物書きとしては、大阪弁と共通語ということばをふたつ持っていること、そしてそういう表現のお皿をいくつも持っているということは、ものすごく得なので

すね。共通語でしか書けない人から「島田さんはいいわね、両方のことばで書けて」っていつも言われますが、本当にそうだなと思います。

④大阪弁で書けること

大阪弁で書くことでとても私がうれしかったのは、現代詩では書けなかった大人の私が思っていることも、大阪弁で子どもの心をうたう童謡のかたちを借りると、全部言えるのです。だから、大阪ことばあそびうたのなかには、風刺がいっぱい入っています。

古い町の名前を捨てていくことが一時ありましたね。そのことについても書いてますし、本当にいろんなことを大阪ことばで、言いたいように書いて、しかも、そんなにきつくならないのですね。やわらかく聞いてもらえて、おもしろいと思ってもらえて、それでいて、あれ、なんかけっこうきついこと言ってるなというふうに感じてもらえる。それが大阪ことばで書き出してよかったと思ったことです。本当にうれしいことばとの出会いでした。

そのうちに、ことばというものの不思議なちからについて、特に痛感したことがあります。

「うち　知ってんねん」（『ほんまにほんま』初出、のちに『うち知ってんねん』にも収録）はみんなに親しまれるようになったうれしい詩です。

うち　知ってんねん

あの子　かなわんねん
かくれてて　おどかしやるし
そうじは　なまけやるし
わるさばっかし　しやんねん
そやけど
よわい子オには　やさしいねん
うち　知ってんねん

あの子　かなわんねん
うちのくつ　かくしやるし
ノートは　のぞきやるし
わるさばっかし　しやんねん
そやけど
ほかの子オには　せえへんねん
うち　知ってんねん

そやねん
うちのこと　かまいたいねん
うち　知ってんねん

『ほんまにほんま』
『うち知ってんねん』

大人でもこういうことありますよね。これもフィクションなんです。よく「ご体験ですか」と聞かれるのですけど、ぜんぜん体験じゃないのですね。私が子育てしていたころに、がき大将みたいな子どもがいて、いろんな年齢の子とじょうずに遊んでくれていました。私はその子が好きだったのですね。あの男の子ええなあと。勉強はあまりできそうじゃなかったのですけど、いいなと思っていたそのキャラを思い出して、その子を主人公にして詩を書いたのです。つまり、私は最初から「あの子」と言われる男の子に対して好意を持って書き出したのです。

だから、ここにある「おどかしやるし」とか、「なまけやるし」「しやんねん」とか、「なになにしやる」ということばを自分で強い自覚のないまま使ったんです。これは、大阪の女性語なんですね。しかも、親愛の情を示すことばなのです。「かくれてておどかすし、そうじはなまけるし、わるさばっかりするねん」でも詩になるのに、そういわないで「おどかしやるし」と使っています。ちょっと間延びしたようなリズムもよかったのですけれど。

大阪では、「しやる」は、もし男性語だったら「しよる」とか、「しおる」になるんです。だから、「しやる」と好意を持った言い方で書いていくから、この詩の展開が悪くなるはずないですね。ことばというのは、自分で選んでいないのに、内なるものが選ばせているところがあります。その子に対して、その人に対して、よく思っているのか、そうでないのかということで、自然に選んでいるのですね。

これと関連することでこの間思ったのは、「産む機械」とうっかり言った人がいましたね。あの人があのことばを選んでしまったのは、意識して選んだわけではないと思うのです。だから、ことばってこわいな、と思います。自分でもよく失言するのですが、「あ、こういうふうに言うのではなかった」、「これやったら悪く取られる」と後悔しても、もう出てしまったことばはだめなんですね。書いているときは消して、書き直しできますけども、音にして出してしまったら、もう最後なのだとよく思います。

それでは「おんなの子のマーチ」（『ほんまにほんま』初出、のちに『うち知ってんねん』にも収録）というのを見てみます。

おんなの子のマーチ

きかいに つよう
げんきがよう
スピードずきな おんなの子やで
うちのゆめは パイロットや
ジャンボジェット機 うごかしたいねん
おんなの子かて やれるねん
やったら なんでも やれるねん

しんぼう づよう
あいそが よう
しゃべるん すきな おんなの子やで
うちのゆめは 外交官や
せかいのひとと あくしゅを するねん
おんなの子かて やれるねん
おかあさんになったかて やれるねん

ちからが つよう
どきょうが よう
スリルのすきな おんなの子やで
うちのゆめは レンジャーや
災害おきたら たすけにいくねん
おんなの子かて やれるねん
そやけど せんそう いややねん
へいたいさんには ならへんねん

『ほんまにほんま』『うち知ってんねん』

この作品は、先ほどの「先生　ふるいわ」と同じく、私のなかにある、女の子の異議申告をしたい、という路線につながっているもので、1970 年代に書きました。私たちは、戦後の職業選択肢なんて本当に少ない中で生きてきましたし、勤められても結婚するとなったら辞めなくてはいけないとか、妊娠すると辞めなくてはならないという時代を経てきました。だから、今のように自由に職業選択ができる時代、男女雇用機会均等法があるすばらしい時代は、1970 年代の私にとって夢だったのですね。飛行機のパイロットになりたいとか、外交官になって世界中飛び回りたいとか、レンジャーになって災害が起きたら人を助けに行きたいとか、女の子にはやらせてもらえなかった職業に対する憧れみたいなものがあったのです。ところが、今や全部できるようになりました。そして、男の子も、保育士や看護師など、女性の職場に進出してきています。消防署に入った女性が放水の筒を持たせてもらったという話を男女雇用機会均等の会合で聞きました。昔は、体力がないからだめだということで、女性は持たせてもらえなかったのが、体格がよくて力が強い女性だったので、持たせてもらったということでした。つまり、女だからだめ、男だからだめではなくて、体力や能力や個性によって、選べるという今の時代はすばらしいと思います。男の人が看護師になったときに、「ぼくが行くとみんなちょっといやがってね、結局女の看護師さんに代わらなきゃいけなかった」という苦労話をしておられました。だけど、今はもうずいぶん患者さんも男の看護師に慣れてきています。本当に夢だったことが実現する時代が来たという喜びを今この詩を読むときに感じます。

永瀬清子さんという岡山の詩人がいますが、その方も、羽衣を奪われた天女のお話をもとに、女たちにいくら能力があっても羽衣を奪われたら飛べないのだ、という詩を書いておられます。そういう女の人たちの思いが底にあって、今だんだんよくなって、少しずつ、少しずつ、生き易くなってきています。むしろ、今だと男の人のほうが生き難いかもしれませんね。

そして、2 連で、「おんなの子かてやれるねん、おかあさんになったかてやれるねん」というのは、子どもを産むと仕事を辞めなければいけない時代とちがって、夫の助けもあるし、保育所も利用して、仕事を

続けることができる世の中になりました。

そういうふうになんでもできるのですが、それじゃ男の子と同じになったらいいかというと、そうではないのです。男女平等や女性の自立をずっと願って詩を書いてきたのですが、男の子がしているから、それを全部すればいいということではないと思うのです。「おんなの子かて　やれるねん／そやけど　せんそう　いややねん」というこの思いですね。男の子にだけ戦争に行ってもらったらいいというのでもなくて、男の子も女の子も戦争にいかないでいい世の中になって欲しいという思いです。

私は女学校のときに、3年、4年と学徒動員で、2年間勉強ができなかった。一番勉強していない学年なのです。ですから、勉強をしたいのに、させてもらえなかったというのが、戦争に対する恨みの一つなのです。理屈や観念ではなくて、ともかく戦争はいややというのは、私たち昭和一桁世代の痛烈な思いです。なんでもなれる女の子、どんな機会でも与えられる女の子だけど、「へいたいさんには　ならへんねん」という女の子であって欲しいな、というのが私の願いです。

こうしたジェンダーフリーや男女平等への思いは現代詩で書くと難しいのです。そういう思いをあらわに出さず、詩としていいものを書きたいと思うからですが、大阪弁の童謡詩で書くと、生に言っても、そんなにいやらしくなくて、子どもたちにも作者の思いが伝わるのではないかと思います。ですから、大阪弁で書けるようになって、子どもたちにいろんなことを伝えられる詩が書けてありがたいなと思っています。

「なんで　大阪弁」（『ほんまにほんま』初出、のちに『うち知ってんねん』にも収録）という詩があります。

なんで　大阪弁

大阪うまれの　おじいちゃんは
東京うまれの　およめさんもろた
こどもは　三人　大阪うまれ
大阪べんしか　つかわへん
　ふたりで　してはる　くちげんか
　かつのは　いつかて　東京べん
　ことばの　せゑだけや　あらへんねん

大阪そだちの　おとうちゃんは
鹿児島そだちの　およめさんもろた
こどもは　ふたり　大阪うまれ
鹿児島べんかて　ようわかる
　そやけど　すきなんは　大阪べん
　まいにち　つこてる　大阪べん
　なんでて　うちの　ことばやもん

『ほんまにほんま』『うち知ってんねん』

これなのです、私の大阪弁に対する思いというのは。本当に、今は「まいにち　つこてる　大阪べん／なんでて　うちの　ことばやもん」という思いがあるわけです。

この詩もフィクションなんです。夫は大阪生まれで、私は東京生まれですが、子どもはふたりしかいませんし、「かつのは　いつかて　東京べん」ということはないのです。ですが、この詩でびっくりしたのが、あるところでこれを読んだときに、お父さんと一緒に来ていた女の子が、「これ、うっとこの詩やねん」と言ってくれたのです。「なんで」と聞いたら、お父さんが大阪育ちで、お母さんが鹿児島育ち、子どもはふたりなんですって。それで、鹿児島弁かてようわかるしって、暗唱してくれたのです。この詩は、単に私が頭のなかで描いた家族を書いただけなんです。それなのに実際に同じタイプの家族がいると知って驚きました。10年ぐらい経って、暗記してくれたお嬢さんと再会したのです。「え、こんな立派なお嬢さんになって」とびっくりしたことがありましたが、ことばが結ぶ縁というのでしょうか、詩が結ぶ縁というの

を感じました。

大阪弁に対する私の思いは、「なんでて　うちの　ことばやもん」、これしかないのです。どこのことばでも、その土地の人が、その土地のことばを大切にしなかったらだめです。ことばというのは伝えなければ消えていきますので、伝える大事さもわかってもらえたらいいな、そんないろんな思いを込めて詩を書いています。

４．詩の広がり・ことばの広がり

①ビジュアル詩

次に、「おおきな木」という詩を紹介します。

おーい
おおきな木
おおきなって
おおきなえだ　ひろげて
おおきなかげ　つくってくれて
おおきなとりや　ちいさなとりや　ようけのむしも
おおきなひとや　ちいさなひとや　いぬねこたちも
おおきに　おおきに　いうて
おおきに　おきにいりの
おおきな木　天まで
おおきなれ
おーい

これはビジュアル詩といいます。つまり見て、すぐに詩の内容を知ってもらえるものです。ことばあそびをしながら、おおきな木のかたちをつくっています。ことばあそびとしては、頭韻をそろえています。一番上の「お」は全部共通していますね。「おーい」という最初と最後のことばをのぞけば、「おおき」の頭韻で全部ならべてあるわけです。そういうことばあそびのルールを踏まえながら、内容はそのおおきな木に対する鳥や虫や大人や子ども、みんなの感謝の気持ちを述べています。あまりいいかたちになりませんでしたが、ことばあそびとしてはちゃんとルールを踏まえてつくれたので、自分としては満足しています。この詩は、3 冊目の『続続大阪ことばあそびうた』のなかに入っています。

②少年少女詩

大阪弁だけで詩を書いているわけではなくて、共通語で書いている少年少女詩もずいぶんあります。「さくら」（『家族』[12]初出、のちに『新編島田陽子詩集』にも収録）を紹介します。

さくら
どうして　そんなに
さ・く・の
いきの　つまるほど
ひかって
あおい　そらから
まっさかさまに
はなの　目が
おちてくる
『家族』
『新編島田陽子詩集』

なぜ共通語で書いたかと言いますと、大阪弁で書いたら、このさくらの息がつまるような美しさを伝えられなかったのです。これをもし大阪弁にしたら、「なんでそないにさくのん」となりますよね。「いきつまるほどひかって　あおいそらから　さかとんぼりに　はなの目が　おちてくるねん」とこんなふうになってしまいます。つまり、「美」というものを叙述的に客観的に書こうと思ったら、大阪弁では無理なんです、私の能力では。もっと大阪弁に長けた人だったら、違うのかもしれませんけども。それで、これは共

通語でしか書けなかった作品ですし、はじめから共通語で発想しています。

「食事」という詩があります。

食事

いただきます
もう七万回は言ってきた
その度にわたしの口に入り
わたしの命になったものたち

今夜は
じゅうじゅうと焼いた秋刀魚に
新米のご飯
おいしいねぇ ほめてあげると
もっとおいしくなろうとする

ごうちそうさま！
思わず大きな声で言ったら
空の高みにいる方が あわてて
口の端を拭ったようだった

『新編島田陽子詩集』

この詩で一番自慢できるところ、この詩のみそは、「いただきます／もう七万回は言ってきた」というところです。実際に数えたのです。いただきますって言い出して、いったい何回言ってきたのだろう、と。1日3回、それに自分の生きてきた日数をかけて。ここに数字が入ることによって、非常に現実感があるというのか、発見があったのですね。数字なしに、「もう何回言ってきただろうか」だけだったら、ちっとも迫力がないのです。「七万回は言ってきた」というところで、読んだ人もびっくりするわけです。じゃあ、自分は何回言っただろう、というふうに。

そして、「じゅうじゅうと焼いた秋刀魚に／新米のご飯」を食べるときに、「やっぱりおいしいねぇ」とほめてあげる感謝の気持ちがあると、「もっとおいしくなろうとする」。実際は、なろうとはしてくれるわけではありませんよね。だけど、そういう気持ちで食べたら、もっとおいしくなると思います。

いのちに対する感謝の気持ちというのでしょうか。何か人間の力を超えた造物主の大きな力というのは、忘れてはならない、そうでないと、人間が傲慢になるのではないか、という気持ちがあります。この詩は、朝日新聞の夕刊に詩を求められたときに書いたもので、いろんな人が読んでくださるのでわかりやすい詩にしなければと思ってつくりました。そしたら、担当の記者の人が、「あ、これやったら高校生でも喜んで読みますね」と言ってくれたのです。私は、中学生でも読んでくれるのではないかなと思いました。

③現代詩と金子みすゞ

やはり、現代詩だからといって、難しいことばで、わかるひとにわかったらいいのだというふうな書き方をしていたのでは、現代詩が嫌われてだめになっていく、世界が狭くなっていくと思うのです。現実に今、本屋さんの詩集の売り場がどんどん狭くなっています。子どもの詩集なら買ってくださる。でも、大人が読む現代詩の詩集なんて、有名な谷川俊太郎さん、新川和江さん、大岡信さん、昔の偉い詩人の詩集は売れることがあるでしょうけれども、私の詩集でも置いてあったら、置いてあったきりです。で、なくなったら、なくなったきりで、あとの補充もしてもらえないですね。現代詩というものが、誰にも読まれていない詩になってしまって、誰が読んでいるかといいますと、書きてと書きてが交換しているのです。私のところに、毎日２，３冊詩集が届きます。出版したら、みんな詩の世界で同人誌を出している人のところへ送るのですね。真剣に読んでお返事を書こうと思っても追いつきません。書きてが読みてで、読みてが書きてであるというところから、ぜんぜん出られないのです。

そのような詩の世界に、一石を投じたのが金子みすゞです。彼女の詩を「あれは童謡じゃないか」と言

う人もあるのですが、それは一面しか見ていないのです。つまり、大人の考えていること、今の大人が言いたいことを子どもにわかることばで、子どもの心で書いているところがあるのです。私はそれが気に入って、何回も仙崎へ行き、『金子みすゞへの旅』[13]を出しました。

みすゞの詩のなかにも、子どもがつぶやいたのがそのまま童謡になったようなかわいい童謡がいっぱいあります。ですが、一方で大人の私を驚かせてくれるものがあったからのめり込んでいったのです。金子みすゞブームと言いますが、あれは誰かが仕掛けてそうなったというのではなくて、現代に生きる人たちが、現代詩にがっかりしてしまって、なにかよい詩がないかなと思ったときに登場して、受け入れられたということも多分にあると思うのです。

私の「大阪ことばあそびうた」シリーズは、おかげさまで版を重ねています。それは、やはりみなさんがおもしろいと思ってくださる作品世界だからだと思うのです。それは非常にうれしいのですが、現代詩も書いているので、読んでほしいという思いがあります。けれど、みなさんのところまで現代詩を広げるちからが、まだ私には残念ながらないのだと思います。

④詩を作ることの意味

「にんげんの季節」（『新編島田陽子詩集』所収）という詩があります

にんげんの季節

虫たちの季節がきた
さまざまな声で
なんとけなげに鳴くことか
星までが
リ・リ・リ・と光っている

天と地にひろがる　生命のうた
その短い季節に
何度も出会うわたしたちは
地球の長い歴史のなか
いま　ほんのひととき
にんげんの季節を生きている
虫たちのように
素朴に愛したいと願いながら
争ったり傷つけあったりして生きている

虫たちが鳴いている
草むらから透きとおった矢を放ち
わたしのこころに
り・り・り・と
清冽なひびきを満たしてゆく

『新編島田陽子詩集』

虫たちは本当に短い季節を生きていて、それに対して私たち人間はもう少し長い季節を生きているのですが、もっと大きな存在から見たら、虫と同じなのです。単に人間の季節を生きているのであって、今の地球の状況では、これがどうなっていくかはわかりません。宇宙のことや人間のこと、命のことなどについて考え、それを詩に書くことによって、自分の認識を新たにし、生きることを真剣に考えることができます。詩を書いてきて、そのおかげでわずかずつでも成長してきたと思います。

今いくつかの詩の教室に関わっていますが、それまで詩に関係なかった主婦や定年退職した男性などが、詩の創作に取り組んでいます。「ぼくは詩集なんか出しません。あんなものは自己満足に過ぎません。」と言っていた男性が、70 歳を越して、「政治や社会に対する自分の思いを詩集にまとめて、世に問うてみたくなった」と言うのです。自分の生きてきた証にしたいという思いもあったのでしょう。詩を書くことによって、定年後の生活がひらけてきて、喜びを得ることができたのではないかと思います。

⑤歌の詩と童謡詩

それでは、最後に「ふるさとは　このまち」[14]という詩を読ませていただきます。

ふるさとは　このまち

岩河三郎　曲

ふるさとはどちらと聞かれたら
いま住むまちと答えよう
ビルがさくらにほのめく春
川が祭りにはなやぐ夏
季節の色あいが心になじむ
このまちですと答えよう

生まれただけで離れたまちより
思い出うすい遠いまちより
友だちがいて家族がいて
笑って泣いて夢をみる　このまち

いいことばかりじゃないけれど
いいたいこともあるけれど
いいことばかりにしたいから
いいたいこともいいながら
みんなと暮らす　このまち

ふるさとはどちらと聞かれたら
いま住むまちと答えよう
道に落葉がぬれる秋
空に風花あそぶ冬
見なれたすがたが安らぎさそう
このまちですと答えよう

（女声合唱曲）

これは、合唱曲のために書いた詩で、ふるさとに対する私の気持ちをうたっています。転校ばかりしてきて、生まれた東京へ行っても町全体が焼けてしまっているから、区役所にも資料は何も残っていない。私が何町、何番地に住んでいたかもわからない。そうすると、ずっと住んできた豊中市が私にとってはふるさとなのです。いろんなことがあるけれど、「ふるさとはどちらと聞かれたら／いま住むまちと答えよう」というのが私の気持ちなのです。「ビルがさくらにほのめく春／川が祭りにはなやぐ夏」というのは、大阪市のイメージで書いているのですが、どこの町にも通用すると思います。ともかく、生まれただけで離れたまちより、友だちも家族もいて、笑って泣いているこのまちが私のふるさと。その詩に岩河三郎さんがすてきな曲をつけてくださって、吹田の混声合唱団やカナリアコーラスという女性合唱団は、団歌のようにして愛唱してくださっているそうです。

このごろ童謡がみんなに求められなくなって、新曲が広まっていきません。幼稚園や保育所でも昔の童謡を歌っているだけです。日本童謡協会が毎年童謡祭を開催していて、新しいＣＤや曲集も出るのですが、それが一般にぜんぜん広がっていかないのです。子どもたちが喜んでいるのは、アニメのテーマソングやおとなが歌うような歌で、新しく作られている童謡の入っていく場がありません。テレビに出てこないので、存在しないのと同じなのです。ですが、童謡詩を書く人は多いのです。なぜかと言いますと、おとなの中の子どもが考えたことを子どものことばで書けるからです。童謡詩という世界が、新しいジャンルとして認め直されてきています。曲をつけて、子どもに歌ってもらえる童謡を書くというのではなく、童謡という形を借りて、おとなの自分の詩を盛り込むという童謡詩です。

５．おわりに

詩といってもいろんな詩があって、ことばあそびうたから童謡詩、少年少女詩など範囲が広いので、本屋さんや図書館に行って一度ご覧頂きたいと思います。もし開いて自分の心に響く詩が一編でもあったら、その人はもしかしたらあなたに合う詩人かもしれないということで、図書館でお借りになったらいいのです。けれど、詩集というのは、読み終わらない本です。いつでも自分の本棚に立てて置いて欲しいのです。読むときの心の具合で、前にはつまらなかった詩が今度はおもしろくなっていたり、その時の受け止め方で詩の値打ちは変わっていきます。

詩人の立場からいえば、日本の詩人たちがことばを選んで一生懸命書いているのですから、おはなしを5冊買うなら、1冊は詩集を買ってくださいお願いしたい気持ちです。韓国は非常に詩が読まれていて、ミリオンセラーが何冊も出ています。このあいだ、私のところに送られてきたのは、私の知らない韓国の男

性詩人の詩集で、『君がそばにいても　僕は君が恋しい』[15]という詩集でした。この詩集はミリオンセラーになって、若者たちに非常に愛されているということでした。

ですが、日本では詩集はなかなか陽が当たりにくいのです。ぜひ一度大きな本屋さんの詩集の棚の前に立って、見てください。そして、いいものがあったら、図書館でお借りになってください。それで本当に気に入ったら買って自分のものにしてくださいと申しあげて、私のお話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

＜注＞

1 『新編　島田陽子詩集』日本現代詩文庫 62　土曜美術社出版　1999 年　スウジの字体
2 「きりん」　第二次世界大戦後まもなく大阪で発行された児童詩の雑誌
3 『杉山平一詩集』（日本現代詩文庫⑯）土曜美術社　1984 年
4 『大阪ことばあそびうた』　編集工房ノア 1986 年
5 『続大阪ことばあそびうた』　編集工房ノア 1990 年
6 「大阪ことばあそびうたー詩人 島田陽子さんと詩の世界を楽しもう！ー」1 月 28 日（日）
7 『続続大阪ことばあそびうた―おおきにおおさか』　編集工房ノア　1999 年
8 『大阪弁のうた二人集 ほんまに ほんま』　島田陽子・畑中圭一／共著　サンリード　1980 年
9 『うち知ってんねん』　　教育出版　1997 年
10 『現代日本生活語詩集』現代日本生活語詩集編集委員会　澪標　2006 年
11 『海のポスト』　手鞠文庫　1984 年
12 『家族』　かど創房　1994 年
13 『金子みすゞへの旅』　編集工房ノア　1994 年
14 「このまち」の所へ自分のまちの名を入れて歌っても結構です
15 『君がそばにいても　僕は君が恋しい』　リュ・シファ/著　蓮池薫/訳　綜合社発行　集英社発売　2006 年

地域のネットワークづくり

大阪府域での子どもの読書活動の報告

日　時：平成 19（2007）年２月 15 日（木）　13 時～14 時

場　所：ホテルアウィーナ大阪

報告者：「乳幼児と絵本」　河内長野市立図書館司書　加田朱さん
　　「学齢期の子どもの読書活動」　寝屋川市立中央図書館　武井昇一さん

主　催：大阪府教育委員会・財団法人大阪国際児童文学館

共　催：大阪府子ども読書活動推進連絡協議会
大阪市教育委員会　大阪府立中央図書館　大阪市立中央図書館　大阪府教育センター　大阪市教育センター
大阪公共図書館協会　大阪府学校図書館協議会　大阪市学校図書館協議会　学校図書館を考える会・近畿
大阪府子ども文庫連絡会　吹田市立中央図書館　枚方市立中央図書館　大阪府教育委員会　財団法人大阪国際児童文学館

１．「乳幼児と絵本：講座『子どもと楽しむ時間づくり～１歳半から 2 歳の幼児を中心に～』報告」

河内長野市立図書館司書　加田朱さん

（１）河内長野市の乳幼児サービスの現状

大阪府子ども読書活動推進連絡協議会よりお話をいただいて河内長野市で実施しました乳幼児の読書推進ネットワークづくり事業「こどもと楽しむ時間づくり」についてご報告させていただきます。

まず、河内長野市について簡単にご説明しますと、天王寺からでしたら近鉄南大阪線、難波からでしたら南海高野線に乗って、どちらも 40 分程ほどで着きます。和歌山の少し手前に位置する人口約 12 万人の市です。市域は広いのですが、7 割が山地で、比較的立地条件が厳しいなか、河内長野市立図書館が中心になり、8 つの公民館図書室とシステム連携を行い、自動車文庫で巡回して、図書館サービスを行っております。

平成 14(2002)年 7 月に開館した図書館は、充実したサービスをめざして建設されました。蔵書数は、18(2006)年 3 月現在で 27 万 6027 冊です。開館 1 年後の平成 15(2003)年 8 月に健康推進課のブックスタート事業への協力を開始し、子ども読書活動推進計画についても、早い段階から検討に入り、2 年の検討期間を経て、平成 18 年 3 月に河内長野市子ども読書活動推進計画を策定しました。この推進計画では、「本のある環境づくり」「本に親しむ出会いづくり」「子どもと本をつなぐ人づくり」「連携の輪づくり」という4つの基本目標を掲げています。

乳幼児に関しては、おはなし会をはじめ、乳幼児健診や子育て支援センター事業など乳幼児と保護者の集まる機会をとらえた保護者への働きかけを行っていく必要があるとうたっています。ただし、現状では、図書館の乳幼児に関する取り組みは、4 ヶ月健診でのブックスタートへの協力と 2、3 歳児とその保護者のおはなし会の実施のみでした。今回、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会から文部科学省助成事業のお誘いをいただいたのは、4 ヶ月から 2 歳の間のフォローアップが出来ないか模索をはじめたときでした。またブックスタートに関わってくださるボランティアの方へのフォローアップも必要という状況でもありました。このようななかで、乳幼児の読書推進事業に取り組むことになりました。

（２）実行委員会形式による事業の計画

今回の事業は、連携をキーワードにしてすすめてきました。乳幼児の読書活動推進には子育て支援の観点が必要なので、乳幼児に関係している行政部局の方と実行委員会を立ち上げる前に打ち合わせをし

て、どのような方々に事業の実行委員会に入っていただくのがいいかを検討しました。

その結果、資料 1 にあげているような組織になりました。地域で乳幼児に向けて読み聞かせの活動をしているグループ、文庫からも委員を出していただきましたが、これらのグループや文庫は連携をめざして 2005 年 12 月に発足した「河内長野子どもと本の連絡会」に加入している団体です。加えて、図書館職員が 3 名、健康推進課、子育て支援課、社会教育課より各 1 名、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会の運営委員で実行委員会を構成しました。

そして、3 回の実行委員会を開催し、事業を実施いたしました。第 1 回実行委員会で、乳幼児やその保護者に直接働きかけるのは限界があるので、乳幼児と保護者を対象に活動しているかた向けの事業もあわせて展開しようということになりました。また、最近では各地区の福祉委員会でも子育てサロンなどを開いているし、子ども家庭サポーターの活動も展開されているという話も出ました。2回目と3回目の実行委員会では具体的な事業の内容を検討し、3 回連続講座にして、1回目は乳幼児と保護者を対象に活動している方々だけではなく保護者にも向けて子どもの育ちに必要な講演を、2 回目と 3 回目は乳幼児と保護者を対象に活動している方向けに、より実践的に活動で役に立つようなわらべうたや絵本の講座を開催し、あわせて講座に参加した人同士が活動を紹介しあい、今後につながるネットワークを作れるような交流会を開催することになりました。交流会については、読み聞かせのボランティアの方、大阪国際児童文学館の土居さん、第3回目の講師の森崎シヅ子さんにご意見をいただき、ワークシートを使用して活動紹介と絵本の紹介を行うことになりました。

（3）事業の実施と成果

実施した「子どもと楽しむ時間づくり」と題した事業の内容につきましては、資料 2 のチラシのとおりです。1回目はおさなご保育園園長の徳永満理さん、2回目はNPO 法人神戸コダーイ芸術教育研究所の小林純子さん、3回目は熊取文庫連絡協議会の森崎シヅ子さんにそれぞれご講演いただき、2 回目と 3 回目の講演後に交流会を開催しました。2 回目の交流会では受講者それぞれの活動紹介を、3 回目の交流会では図書館職員と読み聞かせボランティアで選んだ 140 タイトルの絵本を各3～5冊ずつ用意し、受講者に事前に毎回 10 冊ずつ借りて読んで、それをもとに絵本の紹介をしていただきました。

1 回目の受講者数が 91 名（実行委員などスタッフを除く）を数え、たいへん盛況のうちに終えました。2 回目と3回目の受講者は37名、構成は資料 3 のとおりで、読み聞かせの団体や、子育て支援センターの方、福祉委員会の方など、さまざまな活動をされている方々に参加していただきました。各実行委員の積極的な声掛けによって、多くの団体から参加していただき、有意義な交流ができたのではないかと思います。

このことは、1 回目のアンケート（47 名回答）で、「どこでこの講演会の開催を知ったか」という設問に対し、「市の広報」「図書館」とお答えいただいた方が 26 名、「幼稚園」「健診時の紹介」「子育て支援センター」「公民館」という方が 20 名ということで、普段図書館に来館されないような方も来ていただけたということがわかりました。その点でも、ネットワークが広がってよかったと思います。

講演の内容については、ほぼ 100％の方から「とてもよかった」「よかった」とご回答いただいているので、受講者の満足度も高かったと思います。感想としては「子どもとコミュニケーションを取りながら一緒に絵本を楽しみたい」「このような講演会をもっと開いてほしい」という声が多くありました。こうしたニーズを把握することができてよかったと思います。

2回目の交流会ではそれぞれがどのような活動をしているかが明らかになり、日ごろの活動における悩みや課題がお互いに情報として共有できたのは、今後につなげるために有意義だったと思います。

3回目の交流会では、グループに分かれて絵本について具体的に話し合いをして、後で発表しました。

ワークシートで、読み聞かせを活動に取り入れてないと記入された方と無回答の方をあわせて 8 名、読み聞かせは別の方（保育士や子育て支援センターなど）にしてもらっていると書かれた方が 5 名いましたが、これらの方も一緒に絵本についての話し合いに参加して、今後の活動により積極的に絵本を生かすことに興味を持っていただけたのではないかと思います。

反省点としては、交流会の時間が短くて、じっくりと話し合うことができなかったという点がまずあげられますが、一方で「子どもに対してこんなにたくさんの人がいろいろな活動をしていることがわかってよかった」「参考になった」という意見も多く寄せられました。

今回の事業にこれだけ多くの方が集まってくださり、交流のきっかけづくりができたので、これからも何らかのかたちで活動をともにし、意見交換をするような機会をつくり、今後につなげていくよう努力を続けていきたいと思っております。ありがとうございました。

＜資料１＞

河内長野市の実行委員会

＜構成＞

地域で乳幼児に向けて活動をしている読み聞かせグループ、文庫　３名

〔おはなしのとびら、おはなしパレット、もみの木文庫から各１名

→河内長野　子どもと本の連絡会（２００５年１２月発足）にも加入〕

図書館職員　　３名

健康推進課　　１名

子育て支援課　　１名

社会教育課　　１名

社会福祉協議会　１名（第２回実行委員会より）

大阪府子ども読書活動推進連絡協議会運営委員

＜会議＞

第１回　平成１８年８月２４日

案件　①「乳幼児の読書推進ネットワークづくり事業」の説明

②文部科学省助成事業の説明

③事業の内容と対象者

第２回　平成１８年９月４日

案件　①講座の日程　②講座の内容　②講師

第３回　平成１８年１０月１０日

案件　①講座の内容　②交流会の内容

主催　大阪府子ども読書活動推進連絡協議会・河内長野市教育委員会

子どもと楽しむ時間づくり

～１歳半から２歳の幼児を中心に～

家庭で、地域で、小さい子どもたちと関わっておられる方々の共通の願い。それは子どもの健やかな成長ではないでしょうか。

今回の講座では、心身の発達のこと、遊びや絵本のことなど、子どもの豊かな育ちに何が大切かを、子どもに関わる活動をしている大人たちが共有することができればと考えています。

また行政やボランティアで取り組んでいる活動を紹介し合い、相互理解を深める交流会①や、大人だって絵本を読んでもらうのは楽しい！絵本を使っての実演、意見交換などの交流会②を行い、子どもに関わる活動をしているさまざまな方々が交流し、活動を深めていけるようなきっかけになれば、と考えています。

回	日　時	会場	内　容	講　師	対象・定員
1	１月12日（金） 10:00～12:00	大会議室	講演 楽しい子育て、ホッとする時間 ～あそび・ことば・えほん～	徳永満理氏 （社会福祉法人 おさなご保育園園長 ＜兵庫県尼崎市＞）	100名 （第１回のみ参加 ７０名 全３回参加 ３０名） 河内長野市市民の方
2	１月26日（金） 10:00～12:30	中会議室	＜第１部＞10:00～11:30 講演 子どもとわらべうたを楽しむ ＜第２部＞11:40～12:30 交流会① ～わたしたちは こんなことしてます～	＜第１部＞ 小林純子氏 （NPO 法人神戸コダーイ 芸術教育研究所代表）	30名 河内長野市内で幼児に関する活動に関わっておられ、 全３回出席できる方
3	２月２日（金） 10:00～12:30	中会議室	＜第１部＞10:00～11:30 講演 子どもと絵本をつなぐ活動 ＜第２部＞11:40～12:30 交流会② ～絵本を通してつながる～	＜第１部＞ 森崎シヅ子氏 （熊取文庫連絡協議会代表）	30名 河内長野市内で幼児に関する活動に関わっておられ、 全３回出席できる方

▲　保　　育　　第１回のみ参加の方　　開催日を基準として満１歳以上から就学前の幼児　３０名
３回通しで参加の方　　開催日を基準として満１歳以上から就学前の幼児　１０名
おやつ代として１回につき１００円いただきます。（応募者多数の場合は抽選）
＊子どもの入場はできません。

▲　場　　所　　市民交流センター（キックス）
南海バス・モックルコミュニティバス「市民交流センター前」下車
駐車場に限りがありますので、出来るだけ徒歩又は公共交通機関をご利用ください

▲　参 加 費　　無料

▲　申し込み　　平成１８年１２月１日より１２月１５日まで

河内長野市立図書館にて受付（電話・ハガキ・直接来館申込が可能。ハガキ応募の場合、住所・氏名・年齢・電話番号・参加している活動・一時保育希望の有無・第１回のみの参加か３回通しでの参加かを記入。応募者多数の場合は抽選）
河内長野市立図書館　〒５８６－００２５　河内長野市昭栄町７－１
ＴＥＬ　５２－６９３３
＊障害のある方は事前にご連絡ください。

＜資料3＞

講座参加者所属一覧

		（参加を呼びかけた機関・団体）
おはなしパレット	5名	図書館
おはなしのとびら	5名	図書館
もみの木文庫	3名	図書館
さわる絵本の会	1名	図書館
子育てわいわいルームボランティア	1名	公民館・社会教育課
子育て支援センターものづくりボランティア	1名	子育て支援センター（子育て支援課）
ファミリーサポートセンターボランティア	1名	子育て支援センター（子育て支援課）
人形劇団ぽれぽれ	1名	子育て支援センター（子育て支援課）
清教幼稚園絵本ルーム	1名	子育て支援センター（子育て支援課）
生協　あそびボランティア	2名	子育て支援センター（子育て支援課）
三日市幼稚園おはなし会	1名	教育委員会
南花台福祉委員会	3名	社会福祉協議会・子育て支援センター（子育て支援課）
美加の台福祉委員会	1名	社会福祉協議会・子育て支援センター（子育て支援課）
主任児童委員・子ども家庭サポーター	6名	社会福祉協議会・子育て支援センター（子育て支援課）

関係公共機関・団体より参加

図書館			（実行委員3名）
子育て支援センター（子育て支援課）			（実行委員1名）
市立保育所	（子育て支援課）	2名	
社会教育課・公民館図書室		2名	（実行委員1名）
保健センター	（健康推進課）	1名	（実行委員1名）
社会福祉協議会			（実行委員1名）

計　37名　（実行委員7名）

２.「学齢期の子どもの読書活動：シンポジウム『読書のよろこびを子どもたちに』報告」

寝屋川市立中央図書館司書　武井昇一さん

（１）寝屋川市の子どもの読書活動の現状

学齢期の子どもの読書活動を推進するために、シンポジウム「読書のよろこびをこどもたちに」を平成19（2007）年2月7日に実施しました。そのご報告をさせていただきます。

去年の 3 月、寝屋川市では、図書館を中心に、「寝屋川市子ども読書活動推進計画」を策定しました。その最終章である第４章に、読書活動推進計画を効果的に進めるために、これから何をしていくかが書かれていて、子ども読書活動推進の連絡会を作り、ネットワークを立ち上げていこうということがあげられています。そして、その連絡会が子どもの読書活動の拠点となって、読書活動の推進を効果的に進めていこうと書かれています。

寝屋川市の子どもの読書活動の特色としては、以前から文庫活動が非常に活発で、そこから発展して寝屋川市子どもと本の連絡会ができて、今もたいへん活発な活動をしているということがあげられます。そして、寝屋川市立図書館が昭和 45(1970)年にできて、その 2 年後に寝屋川市子ども文庫連絡会が発足し、以後 30 数年にわたって寝屋川市の図書館とともに読書活動に携わってきているという歴史があります。ですから、ネットワークという観点でいきますと、図書館と市民団体のネットワークは、もう充分に熟しているととらえていただいてよいと思います。そして、現在必要なネットワークづくりというのは、行政と学校関係とのネットワークであるということができます。

そこで、それを念頭に置いて、寝屋川市子ども読書活動推進連絡会を立ち上げました。資料 4 にありますように、構成メンバーとしては、学務課長や教育指導課長という図書館との関わりのある主要な行政部署の代表が連なっていると同時に、文庫やＰＴＡ、寝屋川子どもと本の連絡会という市民団体も加わっています。

この連絡会は、それぞれの部署の長が参加しているので、実働部隊として作業部会を立ち上げました。これは、対象別に、3 つのグループに分けましたが、その中の「小中学校グループ」というのが、今回の事業を進めていくうえで実行委員会となったグループです。ですから、今回、事業を企画したメンバーは、シンポジウムが終わったら解散ではなしに、「小中学校グループ」という作業グループとして今後とも継続して活動していきます。

つまり、学校と行政と図書館と市民がネットワークを組む場として連絡会があり、そのネットワークをもとに具体的に何をするかを話し合い、実践する場として作業部会があるということです。

寝屋川市子ども読書活動推進計画に伴い、学校に対する団体貸し出しのために図書館に 560 万円の予算を今後 3 年間つけていただきましたので、「小中学校グループ」でいかに学校に対する支援をすすめていこうかとと考えていたときに、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会から今回の文部科学省助成事業の打診をいただきました。

（２）事業実施と今後の展望

そこで、資料 4 にありますように、平成 18(2006)年 9 月 27 日に第一回の連絡会を立ち上げ、今回の事業を開始しました。

事業のなかで重点を置いたのは、まず子どもたちの読書活動の実態を知りたいということでした。そこで、寝屋川市教育委員会と学校にご協力いただいて、寝屋川市の小中学校全校全学年 1 クラスずつに読書活動の実態調査を行い、約 6400 人から回答を得ました。アンケートの内容は資料 5 のとおりで、結果の一

部を抜粋したものが資料６です。今後は、この実態をふまえながら、事業をすすめていきたいと考えています。

シンポジウムの内容を検討するために、ネットワークの現状について考えてみましたが、市民団体と図書館とのネットワークは既に長い歴史があります。図書館と行政との関係については、推進計画をたてる段階で、市の企画部門、あるいは情報処理の部門の職員が参加して、計画を練り上げていますので、この時点で行政とのネットワークもある程度できあがっていました。残りは学校とのネットワークであるというわけで、今回の事業が進められました。そこで、今回のシンポジウムの大きな目標の一つとして、学校の先生方に参加していただいてネットワークづくりにつなげたいということになり、校長会を通じて各校お一人ずつは出席してもらうようお願いしました。

そして、資料４にありますとおり、３回の実行委員会を経て、２月７日にシンポジウムを開催する運びとなりました。具体的な内容等につきましては、資料７をご参照ください。

今回のシンポジウムの総括としては、寝屋川子ども文庫連絡会をはじめとして図書館と関係している市民団体の活動報告を学校の先生や市民の方の前で行うことができ、活動を知っていただけたというのは、大きなプラスだったと思っています。

また、今まで図書館や読書とのつながりがあまりなかった学校の先生方に、図書館の活動や何をめざして仕事をしているのかを知っていただけたということは、今後につながる第一歩としては充分な成果があったのではないかというふうに考えております。

今後は連絡会をどれだけ活性化させていけるかにかかっていると思います。そして、図書館を拠点として、みんなに集まってきてもらって、話し合いをし、そこから情報発信を行うということができたらよいのではないかと思っています。このような展望を持ちながら、がんばっていきたいと考えております。ありがとうございました。

＜資料４＞

＜構成＞

子ども読書活動推進連絡会

（学務課長　教育指導課長　社会教育課長　中央図書館長（委員長）地域教育課長（副委員長）寝屋川子どもと本の連絡会

市立校園ＰＴＡ協議会　こころ文庫　こども室課長 健康増進課長 療育自立センターあかつき・ひばり園長）

作業部会（正･副部会長）事務局（図書館）

乳幼児グループ

グループ長　　事務局（図書館）

子どもと本の連絡会・健康増進課

こどもセンター・市立保育所

国際交流協会・学務課

市立幼稚園・こども室

小中学校グループ

グループ長　　事務局（図書館）

市立校園ＰＴＡ協議会・学校図書館を考える会・おはなしを語る会

留守家庭児童会・教育指導課

図書担当教諭（小学校）・（中学校）

地域教育課

多文化･障害者グループ

グループ長　事務局（図書館）

あかつき・ひばり園・にじの会（録音図書）・つくしの会（点字図書）

こころ文庫（市民）・

国際理解教育研究会

＜会議＞

第１回　平成１８年９月２７日

案件　①連絡会発足の経緯説明　②作業部会長の選出

③文部科学省助成事業の説明

第２回　平成１８年１０月１８日

案件　①シンポジウムの内容　②児童生徒の読書実態アンケート実施

③教員の参加要請について

第３回　平成１８年１１月２２日

案件　①アンケートの集計結果　②基調講演の講師選定

③シンポジウムの報告者（市民・学校・図書館）選定

読書アンケート

あてはまる番号に○をつけてください。

1 あなたは？

①男　②女

2 あなたは何年生ですか？

①小学生（　　）年生　②中学生（　　）年生

3 本を読むことはすきですか？

① すき ② どちらかといえばすき ③ どちらかといえばきらい ④ きらい

4 本を読んでもらうことはすきですか？

① すき ② どちらかといえばすき ③ どちらかといえばきらい ④ きらい

5 図書館に行ったことはありますか？（学校図書室はふくまない）

① ある ② ない

6 10月に本を何冊読みましたか？

①本＿＿＿＿冊　②雑誌＿＿＿＿冊　③まんが（まんが雑誌もふくむ）＿＿＿＿冊

※読まなかった人はなぜ本を読まなかったのですか？（いくつえらんでもかまいません）

① 読みたい本がなかった　② 何を読んだらいいのかわからない　③勉強や塾などで時間がない　④ 遊びやスポーツで時間がない　⑤ テレビやゲームで時間がない

⑥ その他（　　）

7 4月から10月のあいだに読んだ本の中で、心に残った本（教科書、マンガ、雑誌をのぞく）のなまえを、3つ書いてください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

8 読んだ人はどこで本を手に入れましたか？（いくつえらんでもかまいません）

① 図書館（移動図書館）で借りた　② 学校の図書室で借りた　③ 学級文庫で借りた

④ 友だちから借りた　⑤ 本屋さんで買った　⑥ 家にあった　⑦ 文庫で借りた

⑧ その他（　　）

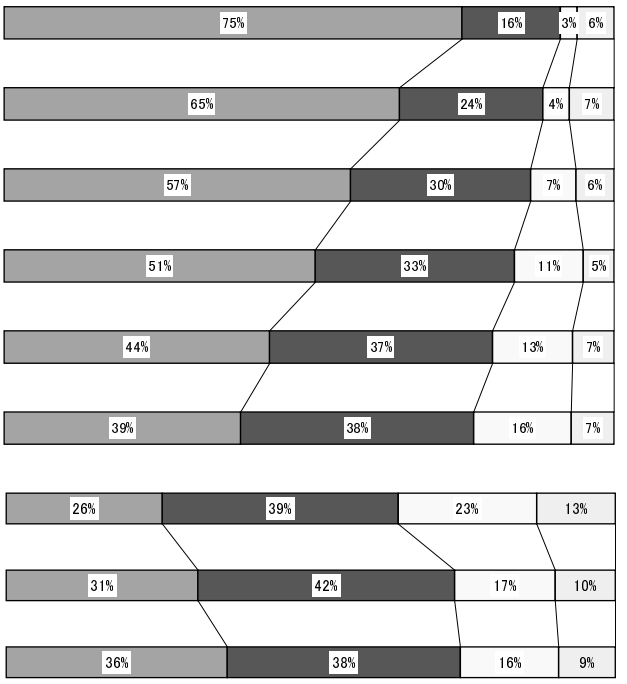
ありがとうございました

読書アンケート結果（抜粋）

＜資料６＞

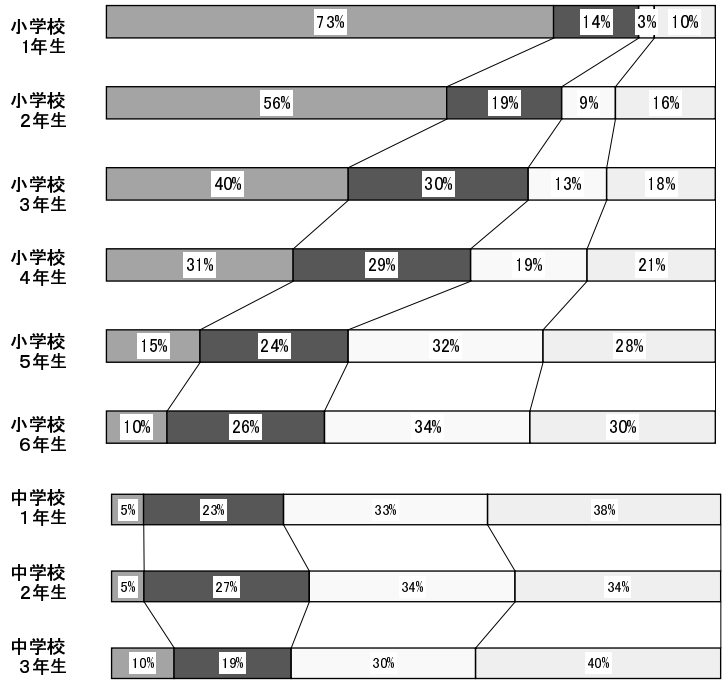
3. 読書は好き？

①すき ②どちらかといえばすき ③どちらかといえばきらい ④きらい



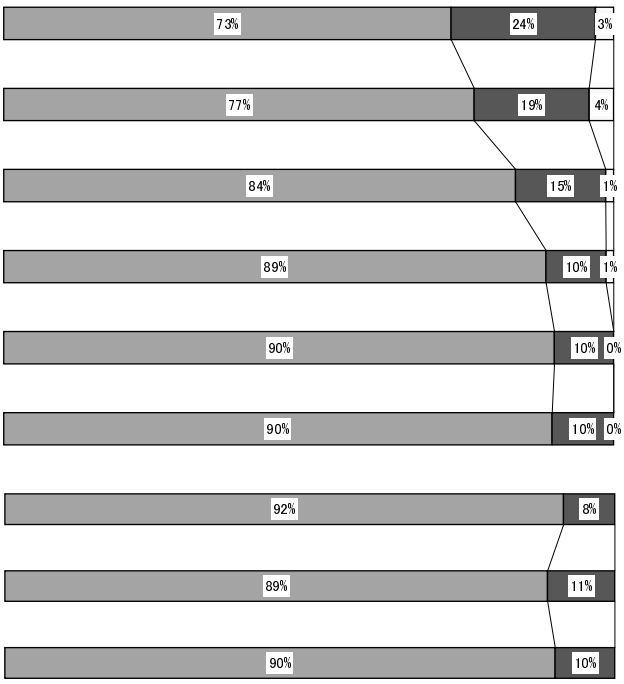
4. 読んでもらうことは好き？

①すき②どちらかといえばすき③どちらかといえばきらい④きらい



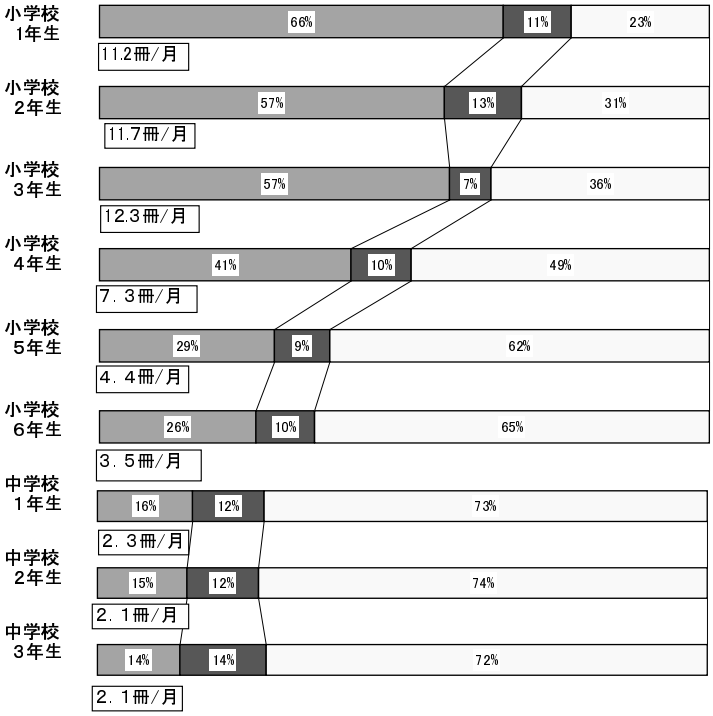
5. 図書館経験

①ある ②ない ③無回答



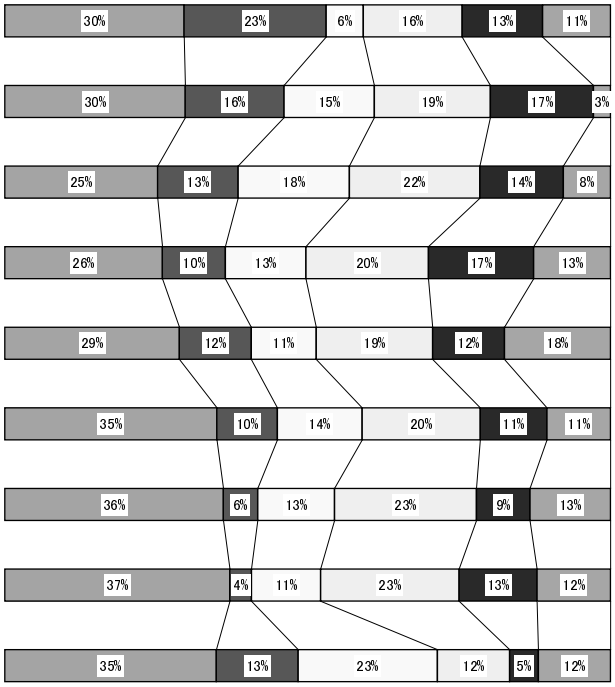
6-1. 10月に読んだ本･雑誌･ まんがの割合

①本 ②雑誌 ③まんが



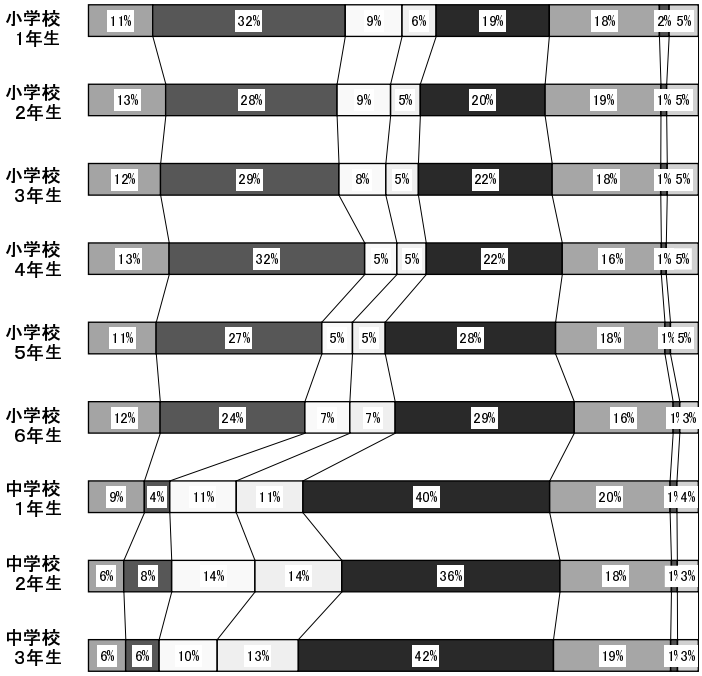
6-2. 読まなかった理由

①読みたい本がなかった②何を読んだらいいかわからない③勉強や塾などで時間がない
④遊びやスポーツで時間がない⑤テレビやゲームで時間がない⑥その他



8. 本を手に入れた場所

①図書館②学校図書館③学級文庫④友だち⑤本屋さん⑥家⑦文庫



シンポジウム
「読書のよろこびをこどもたちに」

子どもたちが楽しそうに本を選び、読んでいる姿って素晴らしいと思いませんか！
図書館の中でも「これ読んで！」っという子どもたちがたくさんいます。
寝屋川市では、こんな世界を市内のあちこちに作りたいと思い「寝屋川子ども読書活動推進計画」をつくりました。
この「計画」を進める第一歩としてシンポジウムを開催します。
基調講演では児童文学作家の松野正子さんに、子どもたちに読書の持つ楽しさやよろこびについてお話していただきます。
素晴らしい読書の世界を子どもたちに体験してもらうため、大人は何ができるのかを、地域から、学校から、図書館から、子どもたちの現状を報告し、昨年11月に実施した小中学校全校読書アンケート調査の結果を踏まえ、シンポジウムを行います。

参加募集

日時	2007年２月７日（水） 午後２時３０分～４時３０分
会場	寝屋川市立中央公民館　第２・３研修室 （寝屋川市池田西町２８－２２　寝屋川市立総合センター４階）
主催	寝屋川市教育委員会 大阪府子ども読書活動推進連絡協議会
後援	寝屋川市立校園ＰＴＡ協議会
参加	無料（申込み不要）
保育	２歳以上の子ども２０人、１月３１日までに直接または電話で予約をしてください。 おやつ代一人１００円必要です。
お問い合わせ お申し込み	寝屋川市立中央図書館　☎072-838-0141 （寝屋川市立総合センター内）

プログラム

基調講演

「読書のよろこびをこどもたちに」
講師　松野　正子さん（児童文学作家・翻訳家）

1935年愛媛県に生まれる。早稲田大学国文科卒業後、コロンビア大学大学院で図書館学を学ぶ。絵本に『こぎつねコンとこだぬきポン』『ふしぎなたけのこ』『かさ』、翻訳に『くつなおしの店』『ラベンダーのくつ』など多数ある。
［「こうさぎけんたのたからさがし」童心社より］

【当日、会場では松野正子さんの本展を行います】

シンポジウム

市民・学校・図書館からの報告をもとに、子どもたちの読書についての現状と今後の展望を考えます。

□市民から　上野　勝子さん（寝屋川子どもと本の連絡会）
□学校から　清原　奈津子さん（寝屋川市立第十中学校）
□図書館から　武井　昇一さん（寝屋川市立中央図書館）

司会　土居　安子さん（財団法人大阪国際児童文学館）

平成１８年度「市町村等における子どもの読書活動推進に関する調査研究」助成事業

オーサービジット

大阪府域での子どもの読書活動の報告

日　時：平成19（2007）年２月15日（木）　13時～16時

場　所：ホテルアウィーナ大阪

報告者：「子どもの読書意欲に関する研究授業」　羽曳野市立西浦東小学校　岡田雅文さん

「大阪ことばあそびうた」　財団法人大阪国際児童文学館　土居安子

主　催：大阪府教育委員会・財団法人大阪国際児童文学館

共　催：大阪府子ども読書活動推進連絡協議会

大阪市教育委員会　大阪府立中央図書館　大阪市立中央図書館　大阪府教育センター　大阪市教育センター
大阪公共図書館協会　大阪府学校図書館協議会　大阪市学校図書館協議会　学校図書館を考える会・近畿
大阪府子ども文庫連絡会　吹田市立中央図書館　枚方市立中央図書館　大阪府教育委員会　財団法人大阪国際児童文学館

１．「子どもの読書意欲に関する研究授業：島田陽子先生をお迎えして」

羽曳野市立西浦東小学校　司書教諭　岡田雅文さん

（１）事業を実施するまで

本来でしたら、直接授業をしました６年生担任の三谷、長谷、そして司書の白井が報告をするところなのですが、司書教諭ということで、私から報告させていただきます。

今回、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会から今回の文部科学省助成事業のお話があって、一番喜んだのは、実は、私たち教職員のほうです。と言いますのは、教職員のなかに島田先生のファンがたくさんいたということがあります。また、６年生の総合的な学習で、「人との出会いを大切にしよう」という目標をたて、たくさんの方に来ていただいて、お話をお聞きし、生き方を学ぶということを取り組んで来ていました。そういった取り組みのなかで、今回、島田先生に来ていただけるということで非常に喜びました。自分たちが、感動したこと、共感したことが、子どもにも伝わっていって欲しいなということと、自分を表現することが苦手な子どもたちがたくさんいますので、島田先生のお話を聞くことによって、そういった術を学んで欲しいという思いがありました。

６年生の教科書のなかに、「感動を言葉に」という単元があります。詩を教材にした単元ですが、それを学習したあと、子どもに「さあ何か書きなさい」といっても、なかなか書けません。しかしながら、実際に詩を書かれている島田先生からお話を聞くことによって、教科書で学習したのとは違う感じ方、受け止め方があって、そこからきっと自分を表現することができるのではないかという期待もありました。

一方で、島田先生のお話を聞いた後、10分ほどの時間で、どの程度詩が書けるのかなという不安もありました。そこで、司書の白井が島田先生の本を紹介したり、掲示板等に島田先生の詩を掲示したり、あるいは図書の時間に島田先生の詩を紹介したりしました。

子どもたちは島田先生とお会いするのをすごく楽しみにしていました。当日の朝も、子どもたちに会うと、「今日、島田先生来るねんな」と言って、資料として渡していたパンフレットを私たちに見せてくれたりして、非常に期待し、楽しみにしていました。

（2）オーサービジット当日の様子

当日は、2 クラスの授業をしていただきました。1 クラスのほうは、わりとゆったりとやりとりしながら島田先生のお話を聞いていたのですけれども、もう 1 クラスのほうは非常に緊張していました。でも、その緊張感というのが、日ごろ子どもたちと接していて、よい緊張感だと感じました。書けるかどうかという不安もあったのですけれども、実際に書き始めると、ひじょうにおもしろい詩が書けました。

一つ紹介したいと思います。これは、お話を聞いた直後に作った詩です。（資料 1 にある「うち　会えてよかった」を朗読）

もう一つは、島田先生のお話のなかから題材を選んだ子どもの作品です。（資料 1 にある「昔の時代・今の時代」を朗読）

まだまだたくさんあって紹介したいのですが、また読んでおいてください。

緊張したクラスの子どもが、後日書いた詩です。（資料 1 にある「きん張するトキって！？」を朗読）

本当にすごい緊張感でした。でも、私たちはその緊張感を見ながら、この子たちがこれだけ緊張する体験というのは、どんな感じなんだろうな、きっと大きなものを受けとめたに違いないなと子どもたちの様子を見ながら実感していました。

書くことに対する抵抗がありながらも、自分を表現すること、そのときにどう表現すればよいのかということなど、きっと何かを学んでくれただろうと思っています。

書いたあと、島田先生に詩を読んでもらった子どもが、ちょっと照れた顔をしながら、それでもすごくうれしそうにしている表情を見て、きっとこの感動や喜びは次につながるという気がしました。

昨日できあがったのですけれども、子どもたちが作った詩を「みんなの詩」という 1 冊の詩集にしました。今、卒業文集等で、6 年生の子どもたちは非常に忙しいのですけれども、自分たちが書いた詩を読むことによって、島田先生から聞いたお話を思い出すかなと思ったりしています。つたないと言えば、子どもたちに本当に失礼です。怒られると思います。自画自賛ですけれども、昨日改めて読んでみて、非常によい詩集ができたなと思っています。

今回、こういういう機会を与えてくださった島田先生と大阪国際児童文学館の方に感謝いたしまして、報告を終わりたいと思います。

＜資料１＞

子どもの読書意欲に関する研究授業

羽曳野市立西浦東小学校
６年１組担任　三谷　康朗
６年２組担任　長谷　愛子
司書教諭　　岡田　雅文
図書館司書　　白井三根子

１．本校の読書意欲を高めるための取組

①朝の読書活動

月曜日を除く毎朝８時３０分から１時間目が始まる８時５０分までの１０分前後実施している。

②「お話会」の取組

地域で読み語りの会をされている方に来ていただいて、１学期に１年生と２年生、３学期に３年生から６年生に実施している。

③図書委員会の活動

５年生、６年生１５名が毎月第１水曜日の１時間と、必要に応じて随時活動している。

主な活動として、本の紹介、大型紙芝居などの上演を行っている。

２．島田陽子先生との学習

①事前指導

・国語科の教材「感動を言葉に」を学習する。
・図書館司書から島田先生の著書、詩を紹介する。
・図書館の掲示板、「図書だより」などで島田先生の詩を紹介する。

②授業の展開

１．島田先生の紹介
２．「先生ふるいわ」を全員で読む。
３．島田先生から「詩の創作について」のお話
　・へんだな、何でやろうなど発見したことを詩にすればいい。
　・何かを発見する気持ちをいつも持っておくこと。
　・人やものに置き換えて、たとえ話にしてもいい。
　・共通語でなくてもいい。
　・自分なりの思いを素直に表現すること。
　・いつもメモをすること。
４．詩の創作
５．島田先生からの講評

③事後指導

・島田先生の授業を受けてのアンケート
・島田先生のお話を整理し、再度詩を書く。

3．お話を聞いた直後に書いた詩

なんでやねん

なんでやねん
なんででけへんねん
でも、気がついたらできてんねん
人生はそんなんかも知れへんなあ

消しゴム

ぼくの役目は縮むこと
人が文字を書くたびに
スリスリスリスリ
減ってゆく
ぼくは結局いなくなるんだ。

昔の時代・今の時代

昔は好きな仕事、好きなことが
できんかってん。
今の時代は好きな仕事、好きなことが
でき、ええなあ。

うち　会えてよかった

うち、会いたい人がおってん。
それは、島田陽子さんにあいたかってん。
そして、今日、島田陽子さんに会えてん。
わかりやすく教えてくれたりして
うれしかってん。
うち、ほんまに会えてよかった。

なんでやろ

なんでやろ。
男ができない仕事があるのは
なんでやろ。
女ができない仕事があるのは
なんでやろ。
体が小さい人ができないのは
なんでやろ。
体が大きい人ができるのは
なんでやろ。
なんでやろと思うことが
いっぱいやわあ。

ぼくのグローブ

おじいちゃんが亡くなって、
おじいちゃんの使っているグローブは
ぼくの手にきた。
今、使っているグローブは、
おじいちゃんからきた
届け物みたいだ。

本

本、
本の中には夢がつまってる。
いろんな人の書いた夢がつまっている。
その本を読んで夢を持つ。
どんどん夢が広がっていく本。
本の中には夢がつまっている。

かげおくり

かげを見つめて
空を見る。
ほら、白くキミが
うつってる。
かげを見つめて
空を見る。
色んな形の
キミがいる。
白い思い出
写真集

これなんぼ

これなんぼ？
そうゆって、いつももの買ってたわ
でも買われへんもんもあんねんで
覚えときや

えんぴつ

えんぴつの目線で見ると、
人はばけもの
消しゴムとかは仲間に見える。

空

三つの顔をした空
毎日ちょっとずつ変わって
おこったり
泣いたり
笑ったり
空が晴れた
みんなにっこり

さんかん

先日　さんかんがあった
みんなスピーチで
前に出た時
まるで　ようがんのようで
終わってからは
マグマのように
気がぬけていた。

4．後日書いた詩

きん張するトキって！？

きん帳するトキってどんなトキやろ・・・
みんなの前でスピーチするトキとか・・・
あっっっそれと　めちゃきん帳したんが
島田先生が来たトキやわっっっ！！
青くて静かな空みたいに、
みィんなロチャックやった。

このクラスがこんな静かになんのって
はじめてちゃうか！？

先生

いつも　年１０才はサバよんでる
ほとんどの子　先生の年　しってんのに
曽我先生も
年　サバよんでた
そんなに　しられたくないんかな

食べてる

みんな食べてる。
「モグモグ」
「パリパリ」
「カリカリ」
私も食べたいなぁ。
「ゴクゴク」
あれ？
私は　飲んでる。

けしゴム

けしゴムは
えんぴつやシャーペンの
書いてまちがえたところを
こすられている
けしゴムって
いたくてよごれる
仕事をしているんだな。

２.「大阪ことばあそびうた：詩人　島田陽子さんと詩の世界を楽しもう！」

財団法人 大阪国際児童文学館 主任専門員　土居安子

（１）　はじめに

オーサービジットとは、作家と子どもが触れ合う場であり、それによって子どもは創りての側から作品に触れることができます。その内容については、ただ作家に来てもらえばいいのではなく、企画する側がその作家の持ち味や､創りてとしての思いが子どもに伝わるように企画することが必要だと思っています。また、作家が読者である子どもに出会うことにも重要な意味があると考えています。

（２）　事前の打ち合わせ

今回は、文部科学省助成事業として、オーサービジットを行うことになりました。計画は大阪府子ども読書活動推進連絡協議会の部会メンバーで立案し､どの作家に来ていただくかを考えました｡そのときに、読書というとついつい「読物」や「絵本」を考えてしまうけれども、文学の重要なジャンルである「詩」をとりあげた事業を行いたいということ、そしてせっかく大阪府域で行うのだから、「関西弁」という生活語を大切にされている作家にお願いしたいということで、ぜひ島田陽子先生に講師をお願いしたいということが決まりました。

そこで、島田先生と部会メンバー、および羽曳野市立西浦東小学校の岡田先生、司書の白井さんが集まって事前の打ち合わせをしました。

そのプログラムとして、詩作品なので、まずは島田先生の作品を楽んでもらうところから始めたいと思いました。

そこで、島田先生とご相談して、子どもに理解できる詩として、島田先生の２編の詩「あかん」「ちゃうちゃう」を選び、催しの冒頭に、これらの作品を子どもたちが声を出してよむことにしました。その後、「くちぐせ」を例にとりながら、島田先生が子どもたちに「詩を書くとは」ということでおはなしいただくことにしました。

次に、子どもたちが詩作をするために、ワークシートを用意しました。最初ワークシートに「関西弁で書いてみよう」と書いていましたが、さまざまな母語の子どもがいること、自分の母語で詩を書くことに意味があることが部会の中で確認され、「ふだんつかっていることばで書きましょう」という指示に変更しました。

（３）　当日の様子

当日の様子については、資料２をご覧ください。

子どもたちは自己紹介と好きなことばを発表した後、動作をつけたり、掛け合いをしたりしながら、島田先生の詩を声に出してよむことを楽しみました。

そして、島田先生に詩についてのお話をいただいた後、詩作に励みました。子どもたちの書いた詩は、資料３をご覧ください。

子どもたちはアンケートに、「詩を作るのが楽しかった」「とってもおもしろかったし、もっと書きたくなりました。」「物語とかも読んでいるけど詩とかもいろいろな詩があって、もっといろんな詩や物語を知りたいと思って興味を持った」「詩を読むときに、心の中で思いながら読むことと、詩を書くときが楽しくかけてよかった」「大阪弁にはまった」「詩を作るのはとても楽しかったので、できてよかったと思った」「今日はありがとうございました。また教えてください。」「じぶんで詩をかけたし、人の詩も聞けたのでよかった。」「島田先生はたくさんの詩を書いていてすごいと思ったし、私ももっと詩を読んだり書いたり

したいと思った。」「最初は難しかったけど、やってあんがい簡単で、楽しかったです。」「今日は、詩を書けてよかったです。島田先生からのアドバイスでうまく書けたと思います。また、こんなことが、あれば参加してみたいです。」「ふだんのことばで詩ができるなんてびっくりした」などの感想を寄せてくれました。

（4）まとめ

詩を声に出すこと、創りての思いをうかがうこと、創りての島田先生に自身の詩を読んでもらうこと、詩を書いてみること、それをプロの人に聞いてもらい、ほめてもらうこと、すべてが子どもたちにとって貴重な機会であったと思われます。

オーサービジットは作家の方が異なればその作家の方の数だけ、ワークショップの方法があると思われます。大阪国際児童文学館では、これまでにも、はやみねかおるさん、武田美穂さん、富安陽子さん、金尾恵子さん、たかどのほうこさん、など多くの作家に来ていただき、平成3月には中辻悦子さんに来ていただく予定です。本を読み、作る楽しさを知ってもらう催しとして、今後も大阪国際児童文学館ではオーサービジットをモデル的事業として取り組んでいきたいと思います。

＜今年度の大阪府子ども読書活動推進連絡協議会の活動について＞

今年度の大阪府子ども読書活動推進連絡協議会は、大人向き、子ども向きともに、文部科学省から助成を受けて、モデル的な事業を実施しました。

河内長野市、寝屋川市においては図書館、市民、行政の方に本当にお世話になりました。議論をつくして、事業ができたことをとてもうれしく思っています。そして、感謝の気持ちでいっぱいです。

推進連絡協議会の部会メンバー、特に大阪府子ども文庫連絡会と学校を考える会・近畿の委員がほとんどすべての実行委員会に参加してくださり、的確なアドバイスをくださったこともとてもありがたく思っております。

いっしょに具体的な活動を行っていくことで、それぞれの市が確実に前へ進んでいらっしゃるのを感じることができました。2年後、3年後にぜひまた成果を発表してもらいたいと思います。

私自身は、この事業にかかわらせていただきながら、大阪府子ども読書活動推進計画を実のあるものにすること、教育委員会や保健センターの人たちが「手伝っている」という姿勢から「一緒にやっている、自分たちも責任をもってやっている」という姿勢になっていただくことの重要性をますます感じ、学ばせていただきました。そして、図書館をさまざまな形で支援、助言、協働している市民の方々の熱い思いを感じ、思いが実現する道筋を図書館がいかに作っていくかが図書館の一つの使命であると強く感じました。

＜資料２＞

大阪ことばあそびうた

−詩人　島田陽子さんと詩の世界を楽しもう！−

大阪国際児童文学館　土居安子

１．日時・場所

2007 年 1 月 28 日（日）PM.2:00～3：30　大阪府立国際児童文学館　講堂

２．参加費：無料

３．対象：小学生以上 17 名（大人は見学）

４．目的：詩人島田陽子先生の詩を声に出して読んだり、詩を作ってみたりして「詩」を楽しむ。

５．用意するもの：声に出して読む詩のプリント、詩のブックリスト、アンケート、模造紙に詩を書いて黒板にはる。

６．全体の展開　（司会：土居）

導入　自己紹介(自分の名前と大阪弁または日常生活でよく使うことばで好きなことば一つ）５分

展開１　詩の朗読（５分×３編）20 分

①「あかん」ドアを開閉してみながら、詩を読んでみる。

②「ちゃうちゃう」島田先生に一度読んでもらう。説明を聞く→みんなで読んでみる

③「やめてんか」みんなで読んでみる。

展開２　詩の創作

・ 島田先生のお話「詩の創作について―大阪ことばあそびうたを中心に」「くちぐせ」を例にとりながら、詩の創作についてお話をうかがう。（10 分）

・ 創作:日常生活で使っていることばや大阪弁を使って詩を作ってみる。（20 分）

ワークシートを使っても自由に作ってもよい。(大阪弁でなくてもよい)

できた人は色画用紙にはって、絵などをつける

・ 発表（20 分）

・ 全体講評：島田先生（10 分）

まとめ　一言感想、本の紹介、アンケート（５分）

＜資料３＞

こども室レポート

寒いけれど青い空が広がる万博公園の中は歩いていてとても気持ちがいいです。
歩きながら、ふと、何かを見つけたら、詩を書いてみませんか。
今月は詩を読んだり書いたりするワークショップを行いましたので、ご報告します。

１月28日（日）大阪ことばあそびうた－詩人　島田陽子さんと詩の世界を楽しもう！－

＜みなさん　こんにちは＞

丸く円になって、島田さんをお迎えし、みんな、名前と好きなことばを一つずつ言いました。好きなことばの中には「友だち」「家族」「強い」「こんにちは」「ありがとう」などのことばがありました。

＜島田さんの詩をこえに出してよんでみよう！＞

島田さんの「あかん」「ちゃうちゃう」「やめてんか」の３つの詩をこえに出してよんでみました。みなさんもこえに出してよむと楽しさがつたわるよ。

あかん　あかん
このドア　あかん
おしても　ひいても
　あかへん
だれがやったかて
　あかん

あかん　あかん
いうたら　あかん
ないしょにしとかな
　あかへん
だれにしれたかて
　あかん

この詩は日本語、特に大阪弁に同じ音で違う意味のことばがたくさんあることから考えつかれたことばあそびうただそうです。

みんなでよむときは、「どんなドアかな？」「ないしょにすることって何かな？」と考えながらよみました。

＜詩を書いてみよう＞

さて、こんどは自分でふだん使っていることばを使って詩を書いてみることになりました。まずは、島田さんから「くちぐせ」の詩を紹介してもらいながら、詩を書くことについておはなしがありました。「発見」があること、そして、ふだんのことばを使うことで本音を詩にすることが大切だと話されました。

それでは参加してくれた人の作品をご紹介します。

やってんねん
K・M

やってんねん
知らんねん
おこってんねん

すきやねん
むりやねん
ねてんねん
ちょっと聞いてよ
やってんねん

べんきょう
W・R

もういや！
べんきょう
へたくそだもん
ぺけいっぱい
けどたまに
まるいっぱい
ひゃくてん
いっぱい
ラッキー

うそ
I・A

うちのお兄は
うそばっかり言う
きらいって　ゆって
かなしくなった時、
うそって言う、
もうゆわへんなと
思っても
またうそ言う

あきまへん

K・S

おかあさん　おこるの　やめてえや
ほんまにほんまに　やめてえな
これいじょういったら　あきまへん
おとうさん　さけのむのやめてえや
よっぱらって　あかくなるのは
あきまへん

おおきに

Y・K

おおきに
ごはんつくってくれておおきに
いっしょに遊んでくれておおきに
勉強教えてくれておおきに
毎日いろいろおおきに

おはようとありがとう

I・T

朝起きておはよう
お母さんに、朝ご飯を作ってもらって
ありがとう
学校に行って、校長先生に
おはようございます。
友達にやさしくしてもらって
ありが１０ぴきでありがとう。

なかよし

S・M

なかよし　なかよし
友だち　なかよし
そやのに　そやのにケンカした、
なんでやなんでや
なんでゆるしてくれへんのか
せっかくゆるしてあげよ
おもたのに

なかよし　なかよし
みんな　なかよし
だから　みんなと友だちや

あ

S・A

選手を応えんする時に、
あーだめだった。
あっ次はがんばれ！
スーパー行く時、
あっわすれ物。
あっそれはさわらないで！
あーあかびんをわっちゃった！
みんな１日「あ」でいっぱい！

強い人

S・S

強い人は　２つにわかれる
１つはたすけて　ヒーローになる強い人
もう１つはだれかの家にしんにゅうして
その家の人をころし　お金をとる強い人

どちらかをえらばないといけないので
強い人はどうなるかわからない

やった～！

S・Y

テストで１００点やった～。やった～！
試験で受かって　やった～。やった～！
走りで　１位　やった～。やった～！
本買ってもらったらやった～。やった～！
応えんしているチームが勝ったら、
やった～。やった～！
地球は、やった～！でいっぱいだ！

発行：大阪府子ども読書活動推進連絡協議会
事務局：財団法人　大阪国際児童文学館
URL：http://www.iiclo.or.jp/
TEL：06-6876-8800
FAX：06-6876-8686
〒565-0826　大阪府吹田市千里万博公園 10-6
大阪府立国際児童文学館内
平成１９（2007）年３月